財団法人 日本ハンドボール協会編　平成24年 12月1日発行（毎月1回1日発行）通巻532号

ハンドボール

特集
男女日本代表新監督決まる
第67回国民体育大会

12
DEC. 2012 No.532



〔表紙写真：第67回国民体育大会成年男子優勝・埼玉・東長濱秀希選手（左），成年女子優勝・熊本・藤間かおり選手（右）写真提供：久保弘毅氏〕

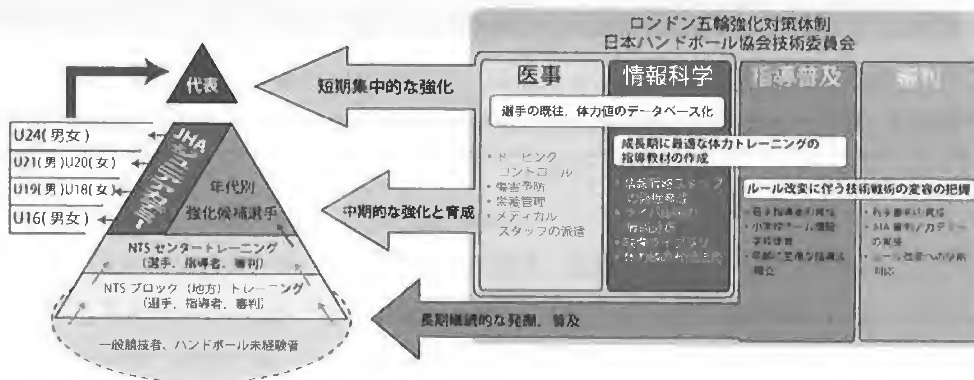
財団法人 日本ハンドボール協会
http://www.handball.jp/

新たな強化体制の構築

（財）日本ハンドボール協会強化本部長　津川　昭

情報科学委員の方が作成してくれる、いわゆる「モチベーションDVD」、これは選手が大事な試合を前にして、心を落ち着かせながらも闘争心を引き出すためのDVDですが、その中に北京五輪の再予選のシーンと試合後の打ちひしがれた選手達の様子が挿入されています。今まで何度このようなシーンが繰返されて来たかと思うと、これからの強化について責任の重さを感じずにはいられません。

ロンドンに向けての体制は…



日本協会の全てのベクトルを「強化」に合わせて進めた。

ロンドンに向け、日本ハンドボール協会は、いわゆるタレントの発掘と一貫指導の構築を目指し、ナショナルトレーニングシステムを運用してきました。そこからピックアップされた選手達は年代別強化指定選手として、JHAジュニアアカデミー生として育成され、それぞれのアンダーカテゴリーの大会に参加・強化され上の世代へとつながって行きます。もうこのシステムが運用され10年の歳月が流れましたから、現在のナショナル選手の多くは、このシステムに乗った選手になります。とても良いシステムで他の競技団体もこのハンドのシステムを真似し、成果を上げたところも多いと聞いています。

5年前にはスポーツ界待望の「味の素ナショナルトレーニングセンター」が完成し、ハンドボールも素晴らしい強化拠点を持つことが出来ました。しかし、皆様ご存知のとおり、残念ながら日本はまたしてもロンドンへの道を切り開くことは出来ませんでした。

私なりにいろいろ現状分析をしてみた結果、下記のようなことを課題として感じています。

①全体を調整するだけのマンパワーが不足し、結果的に各カテゴリーの監督の意向に沿ったチーム造りが中心で、強化部門として「将来像」「戦える戦力・戦略像」がイメージされて無く、一体感が欠けている。

②代表が五輪出場に向け、それぞれのカテゴリー・部門で「何ができるか」「何をすべきか」を議論し、徹底すべき。

③ジュニア、アンダーの最終目標は代表で戦える選手を育て送り込むことだが、時間的制約などで、個の育成よりチーム戦略・戦術に傾注しがちになる。

④共有すべきゴールのイメージ（このようなチームが造れたらアジアチャンピオンを奪回できる）が無い→それぞれの年代で何をすべきかが曖昧になる→強化の一貫性がとれない。

など

これらの課題の対策として下記を実施します。

①強化本部長は専任とし、強化現場の総責任者として強化部門全体を調整する（強化プランの策定、強化スタッフの選任・推薦、指導・育成方針の策定など、男女全てのカテゴリーに対する指導・助言を行う）

②ナショナルアカデミーを新設（ナショナルB的な存在になるが、チームとしてではなく個の育成に特化する）し、専門分野のスタッフを置く。例えば、テクニカルディレクター、アナリスト、フィジカルコーチ、GKコーチ、速攻コーチ等。

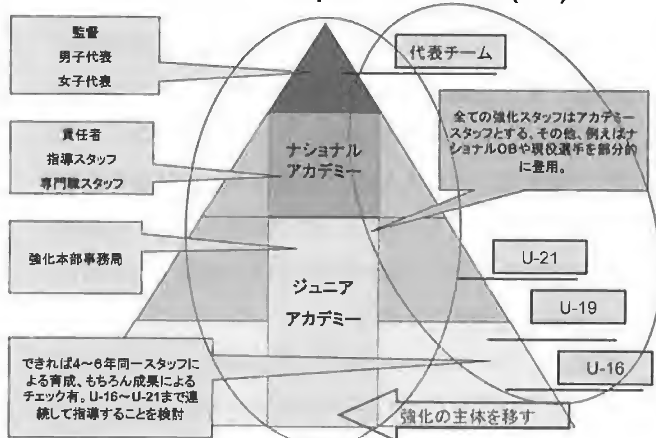
③強化スタッフ間で研鑽し「日本独自」を練り上げ、ゴールのイメージを共有する。

④特にユース層からのフィジカル強化に傾注し、個々のトレーニングメニューの作成と実施に際し、所属監督とベクトルを合わせる。

⑤強化本部をANTC内に設置し、一元管理と強化指導体制（発掘、育成、強化）を効率的に推進する。

全体のイメージは下図のようになり、今まで強化の主体がチーム（右丸）だったのに対し、考え方として、ジュニアアカデミー、ナショナルアカデミーを中心として考えます。

JHA Team Japan 構成図(案)



この度、代表チームの監督に、男子：清水博之氏（大同特殊鋼総監督）、女子：栗山雅倫氏（東海大学監督）に就任頂きました。険しい道のりに違いありませんが、まだまだ日本人に出来ることは沢山あると思います。全てのハンドボーラーの「夢」が叶えられますよう、選手たちと一緒に頑張りたいと思います。皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

リオに向けて新たな

男子ナショナルチーム監督　清水 博之



このたびハンドボール男子ナショナルチームの監督を拝命しました清水博之でございます。就任にあたりご挨拶と抱負を述べさせていただきます。

まずはじめに、ロンドンオリンピック最終予選までご尽力いただいた協会関係者の皆様、現場の先頭で指揮をとられた酒巻前監督およびスタッフ、最後の最後まで諦めずに全力で戦った選手の皆様、本当に御疲れ様でございました。これまでのご努力に敬意を表するとともに、皆様方の想いを胸に、リオデジャネイロオリンピック出場に向け邁進する覚悟でございます。これからもナショナル活動に対し、ご指導ご鞭撻よろしくお願い申し上げます。

ご存知の通り男子チームは、今回のロンドンオリンピックで６大会（24 年間）連続参加できず、また 13 年１月にスペインで開催予定の世界選手権の切符も残念ながら獲得することができませんでした。よって、私のミッションはこの現状をどうにか打破し、28 年ぶりの「16 年のリオデジャネイロオリンピック出場」また「15 年の世界選手権出場」という結果を残すことだと考えております。そのためには、アジア№１になることがオリンピック出場の最短の近道でありますが、北京オリンピック以降アジア各国の実力は均衡しており、それに加え、それぞれの国の特徴が大きく異なっていることが重要なポイントだと感じております。テクニックとスピードまた一貫した育成体制の韓国、大型化に加え多様な戦術を取り入れてきた中国、他国から有力選手を補強している中東勢など、アジアで勝ち抜いて行くためにはそれぞれの特徴を的確に捉え、その「相手の変化」や「戦術の変化」に効果的に対応できるだけの柔軟さがなければ№１になることは困難だと考えています。

活動をスタートするにあたりスローガンを「NEVER GIVE UP」といたしました。在り来たりではありますが、私を含め選手全員と目標達成するまでは、どんな困難な「課題からも逃げず」に「果敢にチャレンジ」し「決して諦めない」という想いから掲げました。また、それを前提に大きく３つのキーワードを軸としてチーム創りに取り組んでいきます。

１つ目は「SPEED　速さ」であります。スピードといってもハンドボールには色々な要素があります。走る、投げる（シュート、パス）、跳ぶ、考える（戦術）、伝えるなど、全てのことにおいてのスピードアップを追求していきます。

２つ目は「SYSTEM　組織化」であります。対戦相手のレベルが上がるにつれて勝敗の多くはミスによって左右されます。試合の中でミスを限りなくゼロに近づけるために「ムリ、ムダ、ムラ」を徹底排除しシステム化を図っていきます。

３つ目は「CHANGE　変化」であります。先程も簡単にふれましたが、基本の試合構想を軸として確立し、その後対戦相手や選手の特徴、試合の流れによって柔軟に対応また変化できるチームを育成していきます。この３点に重点を置き活動を推進していきますが、スポーツの基本である「心技体」の強化積み上げも日々怠ることなく継続させていきます。

男子の世界では近年ヨーロッパ勢が大会の上位を独占し、アジア勢は差を広げられていると感じています。現状２m100Kg の選手がいない日本が、アジアまた世界で戦うためには、「ORIGINALITY」独創性が必要不可欠だと考えます。真似ごとは所詮真似ごとに過ぎず本物には勝てません。ハンドボールはチームスポーツであり、独創性を出せる可能性は多分にあります。それに日本独特の文化や社会のしくみ、特徴や考え方などからハンドボールに加えられる強みを取り入れていけば、世界に通用する日本独自のハンドボールが確立されると考えます。関係者皆様方のアイディアと情熱で日本人にしかできない「日本のハンドボール」を創り上げ、悲願のオリンピック出場を達成したいと思います。

最後になりますが、全身全霊で目標達成するために努力することを御誓いし、監督就任のご挨拶とさせていただきます。

「行くぞ !!!　リオデジャネイロオリンピック !!!」

スタートを切る



女子ナショナルチーム監督　栗山 雅倫

日本女子代表チームの監督を拝命し、約一月が経過致しました。チームは10月29日から、味の素ナショナルトレーニングセンターにおいて選考合宿をスタート致しましたが、必死にトレーニングに取り組む選手の姿を見ながら、あらためて責任の重大さを痛感致しております。この度、この重大な任に就くにあたっては、周囲の方々のご理解とご協力なくしては、お引き受けすることすらままならなかったと思っています。関係したすべての方々に心より感謝申し上げますとともに、必ずや恩返し致したいと思っております。

さて、日本ハンドボールは、オリンピックの舞台から長い間遠ざかっている状態ですが、これまでも強化に関わってきた者として、諸先輩方の並々ならないご努力を目の当たりにしてまいりました。"オリンピック出場"という悲願達成のために、まず、諸先輩方に劣らない努力を精魂込めて進めていくことは勿論のこと、沢山の方の情熱とお知恵をしっかりと反映できるチーム作りをしてまいりたい所存です。

日本ハンドボール協会では、2000年より、他競技団体に先駆けたと言っても過言ではない、"ナショナルトレーニングシステム"を立ち上げました。様々な課題と向き合いながらも、今日に至るまで、NTSを通して重ねて来た強化の方向性に関する議論は、日本ハンドボールのあるべき姿につながるものと確信致しております。先般、男子のユースカテゴリーが、悲願の世界選手権出場権獲得を成し遂げ、女子の世界ユース選手権では、ベスト8という偉業を成し遂げました。直接的ではないにしても、一貫指導事業の流れが、少しずつ成果としてあらわれているのではないでしょうか。

そのNTSにおいては、機動的なハンドボールの実践という意味で **"Total Mobility"** をテーマとして掲げています。この機動性とは、単に動きの機動性を意味するものではなく、様々な意味での機動性を示しています。そこには当然判断の早さという意味も含まれております。NTSに関わってきた者としては、是非この **"Total Mobility"** を実現致したいと思っております。そのためには、ナショナル選手それぞれが、しっかりとした判断力を養う必要があります。ナショナル選手が決断をしなければならない状況は、時に非常に困難であり、そしてその判断一つ一つが極めて重要な意味を持つものです。それらを実現するためには、自立し、自らの意思を表現できるプレーヤーである必要があり、今まで以上に自立した、勝利に徹することを自ら表現できるプレーヤーが絶対的に必要です。その育成に努めることこそが、我々スタッフの任務であると認識致しております。

昨今、東京オリンピック招致の話題が、連日のようにメディアを賑わせております。東京オリンピックで、日本代表チームの活躍を期待してやみませんが、日本ハンドボール界の宿題である、自らの手で、オリンピック出場権を獲得するために、我々が具体的に取り組めることは必ずあるはずです。昨日のトレーニングで、あるナショナル選手の言葉に「"オリンピックに行きたい"ではなく"オリンピックに行く"と言うべきである。」とありました。

今の若者も崇高な精神を持っています。時代によって表現の仕方は変わっても、日本ハンドボール界の悲願は、確実に若い世代に受け継がれています。私は日本ハンドボールが、自らの手でオリンピックに出場することは可能であると思い続けています。1997年、日本で初めて外国人監督としてお迎えした、オレ・オルソン監督が常々チームに語りかけてこられた言葉に「困難なことと不可能なことは違う」というものがありました。そして、日本ハンドボール界に提言した"It is possible!"のワンフレーズは、私にとって忘れ得ぬものとなっています。さらにまた、女子日本代表チームの監督を務められた、黄慶泳氏の日本ハンドボール向上に向けたスピリットは決して忘れてはならないものであります。

日本人として、誇り高く戦ってまいりたいと思います。



日本代表男・女新監督記者会見が開かれる!!

2012年10月12日（金）17時30分から、岸記念体育会館3階の記者クラブで川上憲太専務理事、津川昭強化本部長が同席し、清水博之男子代表新監督、栗山雅倫女子代表新監督の記者会見が開催された。冒頭、川上専務より、直近の世界選手権のランクでは男子が16位、女子が14位であり、オリンピック出場国12カ国の枠にもう一歩と思われるが、現実には厳しい状況が続いている。協会として、この7月には、リオを目指して体制を見直したとの挨拶があった。引き続き、津川強化本部長より新監督の紹介がされた。新たな戦いに臨む新監督のそれぞれのスローガンは、清水博之男子代表新監督が「ネバーギブアップ」、栗山雅倫女子代表新監督は「Total Mobility（トータルモビリティ）」を挙げた。以下、新監督のプロフィールである。


川上専務理事


津川強化本部長

日本男子代表監督



■氏名
清水 博之
（しみず ひろゆき）

■現職
大同特殊鋼
ハンドボール部総監督

■生年月日
1971年7月19日（41歳）

■出身地
広島県

■学歴
広島県立呉昭和高等学校 → 福岡大学

■ハンド経歴
1994年大同特殊鋼入社
1999年　同選手引退
2000年　同コーチ就任（監督：末岡政広氏）
2004年　同助監督就任（監督：冨本栄次氏）
2005年　同上（監督：カンジェオン氏）
2007年　同上監督就任
2012年　同上総監督就任

★2006年ハンドボール指導者留学（ドイツ2ヶ月、デンマーク1ヶ月、スペイン2ヶ月）

★大同特殊鋼監督としての獲得タイトル数10回（実業団2、国体1、総合3、日本リーグ4）

日本女子代表監督



■氏名
栗山 雅倫
（くりやま まさみち）

■現職
東海大学専任講師
同ハンドボール部監督

■生年月日
1971年6月21日（41歳）

■出身地
東京都

■学歴
東邦大学付属東邦高等学校→筑波大学→筑波大学大学院

■ハンド経歴
1996年　男子代表スタッフ（監督：オルソン氏～97年）
1998年　イズミコーチ就任（～00年）
2000年　ブラザー工業コーチ就任
　　　　世界学生女子コーチ（監督：水上氏）
2002年　女子代表コーチ就任（監督：西窪氏～04年）
2005年　東海大学奉職
2009年　女子代表コーチ就任（監督：黄氏～12年）
2010年　女子ジュニア監督（世界選手権16位）
2012年　ヒロシマ国際日本女子代表監督優勝

★1994、1995年オーストラリアに語学留学中、同国クイーンズランド州男子ジュニアチームコーチ。オルソン、フェルドマン氏らとの親交あり。

栗山雅倫：女子日本代表監督 リオに向けて始動!!



先の10月に新たに日本女子代表監督に就任された栗山雅倫監督は、直近の大会である12月インドネシア・ジョグジャカルタにて開催の第14回女子アジア選手権に向けて始動した。
10月30日ANTCに集合した代表候補選手25名は合宿を経て人数が絞られ、日本代表選手としてアジア選手権に臨む。悲願のオリンピック出場への再スタートを切ったわけであるが、当面のアジア選手権、更に、世界選手権が悲願達成への一歩となる。新代表チームの始動に当たり、新監督にインタビューをお願いした。



新たなスタートを切る今の気持ちは

私としては、新監督就任のお話を戴いてから今日の合宿を迎えるまでに、どのようにチームをスタートさせるかが大きなポイントであった。今回選考会とは言え、チームの産声をあげるときにどのようなスタンスで臨むのか、我々はどのようなチームを目指すのか、私として如何に整理をしてこの場に来るかが大きかった。又、どうすれば選手に上手く伝わるか懸念していたが、昨日選手にはプレゼンをして、目指すスタンス・姿勢など理解をしてもらったと思う。今回前女子日本代表ファン監督のもとでやってきたスタッフであるが、ファンさんと同じ戦術を踏襲したり、同じチームを作ろうとは思っていない。ファンさんが指導してきた、謙虚に勝ちを目指すチーム、頑張りきれるチームの礎はできている。

この先、オリンピック出場には大人の選手・自立した選手を作らなければならない。選手に明確にしたのは、自立したプレイヤーと表現できるプレイヤーであり、このことが出来る選手でチーム構成をしたいと考えているということだ。自立した選手とは…あるフレームの中で責任を持って自分で判断できる選手であり、又表現できる選手とは…相手に自分の思いを伝えられる選手であり、言葉、コミュニケーションも技術の一つである。この二つは求めるプレイヤー像としてのキーワードである。

もう一つは、トータルモビリティ…総合的機動力であり、目指すハンドボール像のキーワードである。積極的なディフェンススタイル、動く攻撃であり、未だ細かな戦術は提示をしていないが、代表選手として求められる要素である。今日の練習の中でも、意識をした選手が多くいそうな匂いを強く感じた。

今回の合宿の狙いは

11月の下旬からアジア選手権に向けた最終合宿に入るが、そこに向けて戦い方の基盤を示すこと、それにマッチした選手を選ぶことである。11月下旬の合宿からは、そのまま12月7日開催のアジア選手権へ臨むことになる。今回の合宿には25人が参加しているが、5～7名程度は参加しないことになるが、その後のナショナルに絡まないということではない。

アジア選手権に向けての抱負

ずばり、2013年開催の世界選手権の切符を取ることである。但し、あくまでも、リオを目指したチーム作りの戦い方のベースを持っていなければならない。3年後の戦術も変わるかもしれないが、機動的なハンドボールは変わらないと考えている。3位以内が目標である。

アジア選手権でマークする国は

新しいチーム構成か、継続した選手構成か、各国の状況は未知数でありますが全てのチームをマークする。短い期間で自分たちのチームの骨子を作れるかがポイントになる。機動力を持ったハンドボールは、色々なチームに対して対応できる幅が大きいと捉えている。

最後に、時代を担う若手の選手に一言

時代を担う選手へ…日本のハンドボールは可能性を持っている…機動力を生かして組織力を活かす（日本のスポーツの得意技でもある）をベースにして、判断力が養われれば、日本のハンドボールのステージが上がる。その足がかりとなる提示は示してきており、取分け、NTSの方向性はより高いステージに繋がっていくと確信する。NTSも、トータルモビリティを掲げており、頭と体の機動力を更に養って、全員が日本代表選手を目指して欲しい。



ANTCでの新監督の行動は、ノート片手に選手への声掛けを小まめにされていた。短い練習時間の取材ではあったが、監督が強調される「自立」と「表現できる選手」作りを練習の中でも実践していると、強く感じさせる場面が多々あった。新たなチームが、最後にはリオ出場を果たせるよう、精一杯の声援をお願いします。

第67回
国民体育大会ハンドボール競技

開催期日：平成24年10月5日（金）～9日（火）

最終結果					
種別	優勝	2位	3位	4位	5位
成年男子	埼玉県	愛知県	佐賀県	広島県	宮城県　茨城県　福井県　大阪府
成年女子	熊本県	石川県	鹿児島県	広島県	神奈川県　愛知県　岐阜県　香川県
少年男子	岐阜県	山口県	大分県	宮崎県	岩手県　埼玉県　福井県　香川県
少年女子	香川県	京都府	富山県	山口県	東京都　岐阜県　大阪府　長崎県

総評　岐阜県ハンドボール協会　名倉 昭弘・堀　裕邦

ぎふ清流国体ハンドボール競技会は10月4日の諸会議に引き続き、5日から9日までの5日間、高山市で少年男女、飛騨市で成年男子、下呂市で成年女子の競技が行われました。

岐阜国体の開催に向けては2004年の会場地選定から始まり、06年からは先催県への国体視察を行うなど、高山市の実行委員会を幹事市とし、飛騨市、下呂市の各実行委員会の3市との間で準備を進めてきました。高山市は47年前の岐阜国体でも会場となり、以降ハンドボールが根付き、近年では高校男女とも全国大会で活躍する岐阜県内ではハンドボール競技の盛んなところです。一方、飛騨市、下呂市には市協会もなく実行委員会の方も不安をかかえてのスタートとなりましたが、平成23年にはリハーサル大会としてジャパンオープンを開催することができました。岐阜県では2000年に大垣市を中心とした西濃地区で高校総体を開催しましたが、国体の開催は協会スタッフ全員が初めての経験であり、先催県の皆様に多くのアドバイスをいただきながら準備・運営を進めて参りました。誌面をお借りしてご協力いただいた皆様に厚くお礼を申し上げます。

今大会の会場は、高山市で3会場、飛騨市、下呂市で各1会場の5コートで開催しました。高山市に本部を置きましたが、下呂市と高山市の交通アクセスは国道41号線が大雨や交通事故で通行止めになると移動に時間がかかり運営が困難になることから、成年女子1種別を単独開催としました。飛騨市も高山市からは40km離れたところにあり役員の方には大変ご苦労をおかけしました。高山市のビッグアリーナ、下呂市の下呂交流会館以外の3会場は観客席が少なく十分とはいえなかったと思いますが、地元役員やボランティアの皆様の温かいおもてなしや応援はすばらしく、実行委員会と地元の方々には大変感謝しております。

運営面では、5会場に分かれたことで役員・補助役員とも人数が必要となりました。高山市内のビッグアリーナと中山中学校で高山市協会の方々、飛騨世界生活文化センターは岐阜地区の中学校の先生方と可児高校の生徒、飛騨市の桜ヶ丘体育館は岐阜地区の高校の先生方と県協会の役員、長良高校の生徒、下呂市の交流会館は県内各地のハンドボール関係者と地元で唯一のハンドボール部のある益田清風高校の生徒、多くの方々を中心に競技運営を行っていただきました。審判員の方々から、役員のきびきびとした動きや高校生の爽やかな態度、オフィシャルやモップ係の動きをお褒めいただいたことは、各会場主任の方々の努力の賜物であり、何よりも喜びを感じることができました。

強化面では、2006年に強化委員会を拡大、強化プロジェクト委員会を発足し、小学生の国体世代の選手発掘・育成から年代を追って中学、高校と選手強化を行いました。また、元全日本監督の酒巻氏にアドバイザーをお願いし指導者の研修も行ってきました。成年では元全日本の下川氏、山川氏を岐阜に迎え、選手の招聘、チーム強化を図ってきました。結果は成年女子と少年女子が5位となり、少年男子は最終日の決勝に進み、観客約2000人の中、国民体育大会で岐阜県初となる優勝を勝ち取り、さらに前回の岐阜国体以来47年ぶりのハンドボール競技の男女総合優勝（天皇杯）を獲得するという最高の結果を残すことができました。改めて強化プロジェクト委員会の方々、各種別の選手、スタッフのこれまでの努力と健闘に敬意を表したいと思います。

大会を終え、運営面で選手・役員の皆様にご迷惑をおかけしたことも多々あったこととは思いますが、何とか最終日を迎え無事終えることができました。これもひとえに、大会の開催にあたりさまざまな面でご指導とご協力をいただきました日本ハンドボール協会、長年にわたり誠心誠意準備にあたっていただきました高山市、飛騨市、下呂市の各市国体推進室の皆様、大会運営を支えてくださいました審判員、競技役員、補助員、ボランティア、東海ハンドボール協会関係者及び大会にかかわってくださったすべての皆様のおかげであると深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

最後に、来年東京で開催されます「スポーツ祭東京2013」のご成功をお祈りいたしますとともに、一日も早い東日本復興を心より祈念しまして、国体の総評といたします。



成年男子優勝：埼玉県

埼玉県成年男子監督　岩本 真典

はじめに、東日本大震災復興支援第 67 回国民体育大会「ぎふ清流国体」を開催するにあたり、ご尽力いただいた岐阜県ハンドボール協会をはじめ日本ハンドボール協会、また地元岐阜県のボランティアの皆様、成年男子会場の飛騨市実行委員会、ならびに関係各位の皆様に改めて、心より厚く御礼申し上げます。

この度、第 67 回国民体育大会「ぎふ清流国体」成年男子の部において、私たち大崎電気は埼玉県代表として 4 年ぶり 18 回目の優勝を果たすことが出来ました。

これも一重に日頃から大崎電気ハンドボール部を支えてくださっている渡邉オーナーをはじめ社員の皆様、そして多くのファンの方々の力あってこその結果だと思っております。

そして何より、昨年一年間悔しい思いをした選手の努力の賜物だと思っています。

国民体育大会は 12 名しかベンチ登録が出来ず、大会が始まれば怪我をしても選手の入れ替えが出来ないという苦しい中、試合に出場している選手は勿論、登録を外れた選手もチームの為に最善を尽くし、22 名の選手が役割を果たしてくれたことに感謝しております。

今大会のスローガン「輝けはばたけ誰もが主役」にもあるようチーム全員が様々な場面で輝き主役になってくれました。

また、国民体育大会は普段の大会とは異なり、ボランティアの方々の協力なしには大会の成功はありえません。チーム係の上出さんをはじめ千台屋の皆様にはチームの要望に応えていただきこの場を借りてお礼申し上げます。

今大会は埼玉県としての優勝でしたが、大崎電気ハンドボール部として今年度は 7 月の社会人選手権大会に続き、二つめのタイトルとなりました。開催中の日本リーグ、全日本総合と国内すべての大会で優勝できるよう、これまで以上の努力を重ねてこれからも大会ごとに成長し、国内で継続して勝てるチーム、そして世界に通用するチームを目指して日々、精進していきます。今後とも大崎電気ハンドボール部を宜しくお願い致します。

成年女子優勝：熊本県

熊本県成年女子監督　岡﨑 恭代

後半残り 3 秒、19 対 19。熊本のタイムアウト。ベンチに集まった選手に、黄コーチは、延長戦に突入することを覚悟して、「延長できっちり決めて帰るぞ！」と選手に檄を飛ばしました。タイムアウト終了後、誰もが延長戦になることを予想しながら、フリースローからボールが出される瞬間を固唾を呑んで見つめる中、勢いよく走りこんだ藤井の放ったシュートはゴールネットを揺らし、劇的な幕切れとなりました。

このような劇的な幕切れにより、熊本県成年女子は第 67 回国民体育大会ハンドボール競技で、2 年ぶり 14 度目の優勝を飾ることができました。これもひとえに皆様方のご支援の賜物と、この場をお借りいたしまして感謝申し上げます。

熊本県チームは、去年決勝で石川に敗れ悔しい思いをしてきました。その思いを胸に今回は厳しい練習にも耐え、チーム一丸となり「優勝」の二文字を目標に臨みました。

決勝は、去年と同じ組み合わせ、お互い日頃から切磋琢磨しているチームです。リーグ戦とは違い、この勝敗で全てが決着する一戦です。試合前から選手一人一人の気迫溢れる闘志が伝わってきました。試合は実力伯仲の緊迫した展開となり、最後の最後で勝利をもぎ取ったのは、キャプテン藤井をはじめ、選手個々の勝利への強い思いが大きな力となって優勝につながったと感じました。ベテラン、中堅、若手がそれぞれ悩みながら日々成長したそんな国体だった気がします。

最後になりましたが、今回も私のようなものに監督という重責を経験させていただきましたオムロンチームの高橋 GM、西窪 GM 代行、黄ヘッドコーチはじめ、熊本県ハンドボール協会の皆様方や、選手の皆様に心より感謝申し上げ、



今後ますますのご活躍を祈念し、優勝のご報告とさせていただきます。

熊本県成年女子選手　藤井 紫緒

10月５日から９日までぎふ清流国体が開催されました。

昨年の雪辱を晴らす為、臨んだ今大会をシードからスタートし２回戦では茨城県を破った長野県との戦いとなりました。試合の入り方が悪く基本的なミスが多々ありましたが、ディフェンスから速攻での得点を重ね50対16で勝利。

３回戦は地元岐阜県との対戦、大声援の中相手のスピードある攻撃をディフェンスで踏ん張り速攻、更にセットオフェンスで得点を重ね34対11で勝利。

準決勝は広島県、堅いディフェンスから速攻、スピードのある展開で相手を崩し27対11で決勝へと駒を進めました。

決勝は昨年と同じ石川県との対決となり終始一進一退の攻防が続き19対19の同点の中、残り３秒で熊本県がタイムアウトをとり、最後のフリースローが決まり、20対19で劇的勝利を収めることができました。

この大会でも、ディフェンスでいかに我慢しコンビを崩さず守りきる強さが出来るかが大きな鍵でしたが、ゴールキーパーとのコンビも十分に生かせ、全試合を通して失点20点以下で押さえることが出来たからこそ勝利に繋がったと思います。また、１つのボールに対しての執念はどこのチームにも負けない強さもあったと思います。

最後になりましたが、今大会にあたりご尽力頂きました大会関係者の皆様、そして試合がスムーズに進むよう細かいご配慮を頂きましたボランティアの皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

少年男子優勝：岐阜県

岐阜県少年男子監督　髙橋　淳

この度の東日本震災復興支援、第67回国民体育大会において、少年男子岐阜選抜は、開催地で初優勝という最高の結果を残すことができました。優勝が決まった瞬間、会場全体が歓喜と興奮に包まれ、多くの人と喜びを分かち合えたことは、本当に幸せなことでした。これも、岐阜県ハンドボール協会、岐阜県教育委員会、県体育協会の皆様、高等学校関係者や保護者の皆様、さらには小・中学校時代に子ども達を指導してくださった方々のご尽力があったからこそと、心から感謝しております。

ハンドボール強豪県とは言えない岐阜県が、清流国体に向けて強化に取り組み始めたのは８年前でした。今年の高３、高２をターゲットエイジと定め、小学生のハンドボールを支援したり、ドッヂボール協会と連携を図ったりして強化が始まりました。中学時代は、高校の指導者・選手と合同で強化練習を行ったり、全国のトップコーチを招いて指導者研修会や選手への講習会を行いました。高校では、他県から多くの強豪チームを招聘して強化練習会を行ったり、トップコーチによる講習会を重ねてきました。しかし、強化してきたターゲットエイジ世代においても、全国選抜大会、インターハイともに全国上位に食い込むことはできませんでした。全国優勝の目標は高い壁に阻まれ、先が見えずにいました。そんな中、９月に入っ



てからもNTCでの合宿、東海地区の大学生とのテストマッチを組み、「最後まで苦手な面を克服し競技力を伸ばす」「アスリートとして人間的にも成長する」ことを合言葉にひたすら合宿を続けました。

そして迎えた清流国体。岐阜選抜には、ずば抜けたエースがいるわけでもなく、優れたコンビネーションがあるわけでもありませんが、選手達は、素晴らしい集中力とチーム一丸となったプレーで決勝戦まで戦い抜いてくれました。岐阜県で生まれ育った選手で全国優勝し、県内のハンドボーラーに勇気を与えることで、今までの恩返しをしたいという選手・スタッフの熱い思いが引き寄せた勝利でもありました。

このような結果を残せたのも、強化のために力を貸してくださった全国の指導者の方々、応援していただいた皆様のおかげです。そして、共に戦った素晴らしい選手とスタッフにも心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

少年女子優勝：香川県

香川県少年女子選手　福家 菜月

まず初めに、第67回国民体育大会におきまして、ご支援、ご協力いただきました岐阜県ハンドボール協会、高山市、飛騨市、下呂市の皆様を始め、大会の開催にご尽力いただきました関係各位の皆様に深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

インターハイを終え、国体までの２ヶ月という限られた時間の中で今自分にできること、やらなければいけないことを常に全員が考え、ハンドボールと真剣に向き合いました。私たちが２ヶ月間、自分たちに言い聞かせていたことは、インターハイで優勝したからといって「追われる身」という考え方をするのではなく「自分たちは常に挑戦者である」ということです。もう一度、日本一になりたいという強い気持ちを持ちこの大会を迎えました。

初戦では、日ごろの練習から課題となっている２対１、３対２を攻められず、練習中に起こるミスがそのまま試合に出てしまいました。試合後のミーティングでは、個々ができなかったことを見直し、自分たちが今までやってきたことをもう一度確認しました。全員が気持ちを切り替え、次の試合に挑みました。準決勝、決勝ではコートの中の７人がベンチからの声をよく聞き、チーム一丸となって戦うことができました。

国体では力のあるチームに対してインターハイと同様、「守って速攻」という自分たちの戦い方を貫き、優勝することができました。日本一になったとき、目標を達成できたことの喜びと、支えてくださった方々への感謝の気持ちでいっぱいでした。

最後になりましたが、日頃からご支援、ご協力いただいた県体育協会、県ハンドボール協会、県高体連専門部を始め、会場で応援してくださった皆様、支えてくださったすべての方々に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。








左の写真４点　写真提供：久保弘毅

【少年男子・決勝】

岐阜　31（13－10、18－14）24　山口

岐阜県のスローオフで試合開始。開始1分30秒、山口県5番木下のミドルシュートで先制。岐阜県10番堀のミドルシュートで同点とする。その後、堀の2連続得点、11番平野の速攻で11分、4対2とリードする。その後、9番森下のカットイン、3番横山のカットインとシュートと得点を重ね、15分、6対3となる。山口県は、2番助安のポスト、3番徳田の2連続得点で同点となる。岐阜県はディフェンス、5－1から4－2に変え、山口県3番徳田をマーク気味に守る作戦に出た。22分、岐阜県8番政井のパスカット速攻及び9番森下のミドルシュート等で7対9と2点リードする。その後、一進一退の攻防が続き、残り3秒、岐阜県3番横山のポストシュートで得点し、前半13対10で岐阜県の3点リードで終了した。

後半が始まり、岐阜県3番横山の速攻でリードを広げる。開始2分で岐阜県のシュートが次々に決まり、6点差とする。山口県は岐阜県の4－2ディフェンスを崩せず、リズムに乗れない。ようやく5分過ぎ、9番池岡、3番徳田の連続得点するも点差は縮まらず10分過ぎより、岐阜県は山口県3番徳田のマンツーマンディフェンスとしリズムに乗せない。その間、着実に得点し、17分過ぎには8点差までリードする。18分過ぎ、岐阜県11番平野が2分間退場となる間、山口県に3連続得点される。22分過ぎ、山口県はマンツーマンディフェンスにする。岐阜県はリズムが乱れ、3得点され、4点差となる。しかし、岐阜県10番堀のカットインシュートで得点し、リズムをつかむ。岐阜県は安定した守備と着実な攻撃で得点し、動きが最後まで切れなかった。最後、11番平野のミドルシュートが決まり、31対24で岐阜県が初優勝した。

【少年女子・決勝】

香川　24（11－8、13－9）17　京都

香川県のスローオフから始まり、11番谷選手がミドルシュートを2本決めて勢いづく。その後も7mスローと、8番内海選手のサイドシュートが決まり、4対0とリードを広げる。京都府は、楠本監督の指示からポジションチェンジによりチャンスを作り、7mスローと9番正木選手のポストシュート、5番古賀選手のロングシュート、2番杜氏選手のサイドシュート、ロングシュート、再びサイドのループシュートが決まり、1点差まで徐々に追い詰める。一方、香川県は、21分28秒にタイムアウトを申請。その後7分間の膠着状態から4番赤松選手のループ、3番長尾選手によるカットインで3点差に広げると、京都府は29分27秒にタイミング良くタイムアウトを申請するも差を縮められず8対11で前半を終了した。

後半、京都府の5番古賀選手が本日5点目を決め2点差にするも、香川県8番内海選手によるカットイン、速攻に続き、11番谷選手の本日6点目が決まり、たまらず7分39秒にタイムアウトを申請した。しかし、再び谷選手にミドルシュートを許し、6点差となる。その後、9番正木選手がサイドシュートを決めるも、香川県4番赤松選手、8番内海選手、11番谷選手、5番十河選手の追加点を許し、途中7mスローで1点を返すも9点差となる。7番秋山選手のサイドシュートが2本決まり再び勢いづいたが、香川県の堅いディフェンスと1番馬場選手のファインセーブにより、5番古賀選手の速攻、3番北川選手の連続ポストシュートの追加点にとどまり、3点を返すも7点差を残し、香川県がインターハイの実力を存分に発揮した試合結果となった。

【成年男子・決勝】

埼玉　33（14－14、19－14）28　愛知

前半開始直後、愛知県は4番富田が退場し、いきなりのピンチ。しかし、組織的なディフェンスにより埼玉県にペースを握らせない。埼玉県は9分過ぎ、9番永島のダイナミックなポストシュートで会場を沸かせると、徐々に流れを掴み4連続得点。愛知県に逆転し、引き離しにかかる。一方の愛知県は、6番石戸の連続得点で食い下がる。愛知県は21分過ぎ、タイムアウトをきっかけに4番富田、6番石戸、2番藤本の3連続得点で同点に追いつく。その後は両者譲らず、必死の攻防が続く。前半終了間際、愛知県は7番木切倉のカットインで同点に。このプレーで埼玉県は3番猪妻が退場になった。両者互角の戦いを見せ、前半戦を終了した。

後半、埼玉県は5人でのスタート。しかし、7番宮崎がパスカットからの速攻で得点し、流れを引き寄せる。じわじわ点差を広げ、9番永島のポストシュートで4点差。埼玉県が試合を優位に進める。一方、愛知県も2番藤本が奮起。連続でサイドシュートを決め、これ以上離されまいと食らいつく。24分過ぎ、埼玉県7番宮崎の速攻へのプレーで愛知県7番木切倉が退場になると、埼玉県が一気に攻撃をたたみかけて点差を広げる。33対28で埼玉県が勝利し、優勝を決めた。

【成年女子・決勝】

熊本　20（12－11、8－8）19　石川

石川県のスローオフで試合開始。先制は熊本県11番永田がポストプレーで2点。石川県4番上町がカットインプレーによる7mスローを決める。熊本県2点リードのまま15分経過。流れを変えたい石川県。タイムアウトを取るが熊本県の堅いディフェンスをなかなか突破できない。一方、熊本県は自身のタイムアウト後3点連取し、点差を広げるが、石川県4番上町の気迫あふれるプレーで食い下がる。熊本県2番藤井の切れ味鋭いロングシュートで突き放すが、終盤石川県が3連続得点し、前半を熊本県12対11の1点リードで折り返す。

後半開始早々、石川県が同点に追いつき一気に波に乗りたいが、ここから終了まで、まさに決勝に相応しい一進一退の状態。両チームの繰りなす激しい攻防は、手に汗握る観衆を魅了した。熊本県6番東濱、11番永田、8番石立の得点で先行すれば石川県は7番若松、4番上町、9番横嶋が応酬。熊本県ゴールキーパー藤間は途中負傷退場し、ついでゴールを守った12番山中、石川県のゴールキーパー12番田代の再三のファインセーブが光った。試合残り時間1分までこの一進一退の状態が続き、19対19となる。両チーム最後の攻撃チャンスにタイムアウトを取り合う。先に攻撃した石川県4番上町のシュートを阻止した熊本県が、残り3秒でタイムアウトをとる。熊本県のフリースロー、石川県ディフェンスの高い壁、熊本県2番藤井のサウスポーが唸る。「ピピー」石川県ゴールのネットが揺れる。熊本県の勝利を決した劇的シュートで試合終了。20対19。熊本県は2年振りに日本一の座を奪還した。

掛金が改定されました

スポーツ安全保険

傷害保険

賠償責任保険

突然死葬祭費用保険

5+ 5名以上の団体でご加入ください

写真提供　空手道マガジン月刊『JKFan』
毎月23日発売　http://jkfan.jp/jp/

対象となる事故 団体活動中の事故／往復中の事故

保険期間 平成24年4月1日午前0時より平成25年3月31日午後12時まで(申込受付は平成24年3月から)

加入区分・掛金・補償金額

掛金が改定されました

(団体活動を行う5名以上の方々で、加入区分をそれぞれご選択のうえご加入ください。)

加入対象者		補償対象となる団体活動	加入区分	年間掛金(1人当たり)	傷害保険金額 死亡	傷害保険金額 後遺障害(最高)	傷害保険金額 入院(日額)	傷害保険金額 通院(日額)	賠償責任保険支払限度額(免責金額なし)	突然死葬祭費用保険支払限度額
子ども（中学生以下(特別支援学校高等部の生徒を含む。)）		スポーツ・文化・ボランティア・地域活動	A1	800円	2,000万円	3,000万円	4,000円	1,500円	身体・財物賠償 合算 1事故 5億円 ただし、身体賠償は 1人 1億円	突然死(急性心不全 脳内出血など) 葬祭費用 180万円
		上記団体活動に加え、個人活動も対象 上段：団体活動中およびその往復中の補償額 下段：上記以外(個人活動など)の補償額	AW	1,450円	2,100万円	3,150万円	5,000円	2,000円	身体・財物賠償 合算 1事故 5億500万円 ただし、身体賠償は 1人 1億500万円	
					熱中症および細菌性・ウイルス性食中毒の場合、保険金額はA1区分と同様					
					100万円	150万円	1,000円	500円	身体・財物賠償 合算 1事故 500万円	対象となりません
					熱中症および細菌性・ウイルス性食中毒は対象となりません。					
大人	高校生以上 65歳以上の方も加入できます。	文化・ボランティア・地域活動 団体員の送迎、応援、準備、片付け	A2	800円	2,000万円	3,000万円	4,000円	1,500円	身体・財物賠償 合算 1事故 5億円 ただし、身体賠償は1人 1億円	突然死(急性心不全 脳内出血など) 葬祭費用 180万円
		スポーツ活動 スポーツ活動の指導・審判	C	1,850円	2,000万円	3,000万円	4,000円	1,500円		
		子どものスポーツ活動の指導・審判 ※C区分でも加入可	AC	1,300円	1,000万円	1,500万円	2,500円	1,000円		
	65歳以上	スポーツ活動 ※C区分でも加入可 ※スポーツ活動を行わない方はA2区分	B	1,000円	600万円	900万円	1,800円	1,000円		
全年齢		危険度の高いスポーツ活動	D	11,000円	500万円	750万円	1,800円	1,000円		

※同一団体で1口しか加入できません。中途加入する場合、中途脱退する場合も年間掛金を適用します。加入後の加入者の入換え、加入区分の変更はできません。
※危険度の高いスポーツ活動はD区分以外では補償されません。

インターネットからの加入受付を行っております。詳しくは、ホームページをご覧ください。 Web スポーツ安全協会 検索

公益財団法人 スポーツ安全協会

〒105-0003 東京都港区西新橋1-6-11 TEL 03-5510-0022

保険の詳しい内容、資料の請求は、ホームページをご覧ください。

http://www.sportsanzen.org

●資料請求は、インターネットより受付けております。

この広告はスポーツ安全保険(傷害保険(スポーツ安全協会傷害保険特約・スポーツ安全協会傷害保険特約(学校管理下外担保)・突然死葬祭費用担保特約付帯普通傷害保険)、賠償責任保険(スポーツ安全協会賠償責任保険特約付帯施設賠償責任保険およびスポーツ安全協会傷害保険特約(学校管理下外担保)))の概要についてご紹介したものです。ご加入の際には、必ず「スポーツ安全保険のあらまし」および「重要事項説明書」をよくお読みください。詳細は保険約款および特約書によりますが、ご不明の点がございましたら(財)スポーツ安全協会または東京海上日動火災保険株式会社までお問い合わせください。

〈引受幹事保険会社〉
東京海上日動火災保険株式会社 (担当課)公務第2部公務第1課
TEL 03-3515-4133 (平日9:00～17:00)
〈共同引受保険会社〉
あいおいニッセイ同和　共栄火災　損保ジャパン　大同火災　東京海上日動　日新火災　日本興亜損保　富士火災　三井住友海上

平成24年1月作成 11-T-09434

女子 U-16 日韓スポーツ交流 派遣・受入

派遣：2012年9月11日（火）－16日（日）
韓国・仁川（インチョン）市
親善試合　日本　22（14-11，8-15）26　韓国

受入：2012年9月19日（水）－24日（月）
愛知県・名古屋市（ブラザー工業体育館）
親善試合　日本　27（11-11，16-13）24　韓国



団長　角　紘昭

9月11日からの訪韓で始まった2012 U16女子日韓ハンドボール交流は9月24日の韓国チーム帰国で、16回目の本事業が終了しました。今回も昨年と同様に、合同練習会4回、練習ゲーム12回、そして親善試合2回（韓国ラウンド・日本ラウンド）を行いました。韓国の体格は　平均身長168.0㎝（日本166.7㎝）とやや大きく、全体的にがっちりした感じを持つチームでありました。

今年も昨年と同様にANTCを使用せず、HC名古屋と愛知県協会のバックアップでブラザー工業の体育館を中心に実施する計画を立てました。出発前、9月9日からの事前合宿でスタッフを含め名古屋の宿舎に集結し結束してスタートしました。スタッフ会議で確認し徹底していたことは、

・選手のほとんどは、ナショナルチームとして初めての経験であるため、その意義を十分に理解させる。
・各チームの大切な選手を預かっているので、精神的にも、技術的にも少しでも成長させるよう指導する。
・個人の技術の伸びとチームとしてのコンビネーションが練習ゲームや親善試合に表現できるかにこだわる。
・親善交流であることを意識し、合同練習や日常の生活の中で韓国選手への心配りを忘れないようにさせる。
・チームジャパンとしてのまとまりを作るために、練習中ばかりでなく合同の生活の中でも進んで自分を表現するようにさせる。

等々の点を確認しました。

事前合宿は、オフェンスでは、バックプレーヤー・ピボットプレーヤーの連携や、ウイングプレーヤーのシュート確率を高めること、ディフェンスでは、高い位置からのシュートや、ピボットへのパスに対する防御、ウイングへの素早いボール回しへの対策等々多くの課題を共有して韓国ラウンド（訪韓）に臨みました。

合同練習においては、韓国のフットワークや個人技能において、たくさん学ぶものがありました。ただ、DFからOFへの切り換えの速さは、近年の日本チームにない早さとの評価を得ました。事前合宿で課題としたところを確認し合いながら練習ゲームや親善試合に臨みました。

韓国ラウンドでの親善試合は、【日本22（14-11,8-15）26韓国】という結果でしたが選手たちには悲壮感はなく、高い位置からのシュートに対するDFの確認、OFではウイングのシュートの確率を上げることを日本に戻ってからの練習の目標としました。さらに、韓国チームのゲームに対する集中力も日本チームが学ぶことの一つとしました。

9月16日に帰国し、そのまま名古屋で合宿を続けました。韓国での課題に取り組む中、特にDFとキーパーとの連携の確認、サイドシュートの重点的な練習等々行い9月19日から韓国チームを迎え入れました。長丁場となったU16女子ナショナルも徐々にチームとしての意識が高まり、集中力を途切れさせないように声をかけあう場面が見られるようになってきました。

日本ラウンドでの親善試合は、愛知県協会、地元日本リーグ運営委員の方々のご配慮で、豊田合成健康管理センター体育館で、日本リーグ第4週第1日目の午前中に組み込んでいただき、多くの観客の前で、国際試合の雰囲気を十分に感じながら行うことができました。試合内容は1点を争う緊迫したものでしたが、DFのコンビネーション、ウイングプレーヤーの活躍、最後まで集中力を切らさないチームワークで【日本27（11-11,16-13）24韓国】という結果を出すことができました。昨年、今年と様子を見てみますと、やっと韓国の背中が見えてきた感じがします。ひとり一人の技術については韓国選手との差はまだ、数歩の距離があります。しかし、近年のU-12、U-15の充実や、NTS、アカデミーの整備、指導者の意識の高まりを見ますと、韓国と互角以上に戦える日は遠くないと確信しています。

親善交流の面では、合同練習会、ミーティングルームを活用した選手同士の歓談、観光、等々を通して十分に交流することができ、帰国の際には涙を流して別れを惜しんでいる姿も見られました。

この様な結果を出すことができたのも、所属チームの監督の方々や、保護者の方々のご理解とご協力のおかげと深く感謝いたします。また、昨年に引き続いて事前合宿や受け入れに会場を提供していただきましたHC名古屋、愛知県協会の方々にも厚くお礼申し上げ2012・U16女子日韓ハンドボール交流事業の報告とさせていただきます。



監督　尾石 智洋

日韓スポーツ交流・親善試合から得るものはとてもたくさんありました。

それを大きく３つにまとめると

①国際大会の意識を早くから持つトップアスリートを育成できる

②韓国チームからオリンピックで勝つための指導方法を学ぶことができる

③国を越えた友情を育むことができる

私は５年間で多くのことを学びました。そして得たことを実践するべくU16の活動で指導に当たってみました。その結果２年連続で、日本は韓国に勝ちました。この試合に勝つことが一番の目的ではないのかもしれませんが、選手たちの自信を伸長させるためにも、勝ちを求めました。ここに到達できたのは、日本国内での育成方法が多く広まり個人の装備力が上がってきたからだと思います。しかし、個々の技術力（例えばフェイント・シュート等）はまだ韓国の方が少し上だと思います。なので実際に戦術面でその壁を乗り越える必要があります。あと少しU16までの標準装備力を上げる努力ができたら日本と韓国のオリンピック決勝戦も夢ではないと思います。私も中学校の指導者の１人としてみんなで高め合って、たくさんの仲間で育てる環境を望んでいます。

この活動に当たり、各所属チームの顧問の先生方をはじめ保護者の皆様、学校関係者の皆様にもご理解いただき将来の為に時間をいただき本当に感謝しております。また、たくさんの応援団も含め、愛知県の関係各位にも厚く御礼申し上げます。最後に韓国チームヘッドコーチのオウさんのお父様が交流期間中にお亡くなりになりました。角団長のもと皆で黙祷しご冥福をお祈りさせていただきました。オウさんには早く元気になってほしいです。今後益々国を越えて、ハンドボールを通して関われるたくさんの人に感謝したいと思います。ありがとうございました。

主将　河原畑　祐子

今回のU16では去年に比べて強化合宿が多くあり、チームでトレーニングをつむ時間がありました。一番最初に言われた事「とにかく馬鹿になれ」を信じ、大声を出して笑顔で取り組みました。メンバーの大半が始めての異国の地に足を踏み入れ、慣れない環境に戸惑いを感じていました。しかし韓国の練習では日本らしさを出して取り組みました。韓国ラウンドでの試合は、前半DFから速攻の展開からシュートへつなげることができました。雰囲気も良く、チームが一つになっていたと思います。前半は日本がリードして後半へ臨みました。後半最初の五分で同点にされてしまい、チームの雰囲気も落ち前半出ていた声も消え、完全に相手のペースでした。その後なんとか粘って追いかけるも、シュートミスなどで得点を広げることが出来ず試合が終わりました。勝てた試合で勝てなかった自分たちの弱さを知り、日本ラウンドでは必ず勝つという気持ちが全員に出てきました。日本に帰ってからは、JOC愛知選抜や愛知商業・市邨高校に大変お世話になり課題だった後半も集中力を切らすことなくプレー出来るように練習出来ました。日本ラウンドでは緊張とも戦いつつ前半リードされても粘って同点で抑えました。課題の後半、少しのミスはあったものの、全員がゴールに向かって攻める姿勢で試合をすることができたと思います。最後オールマンツーをつかれても足を動かして得点することができ、二年連続で勝たせて頂きました。今回の親善交流にあたって、韓国チームとも大変仲良くなる事ができ、充実した日々を過ごす事ができました。それは、家族を始め所属チームの監督さんや仲間、私達に支援をして下さった方たちのおかげだと思います。この素晴らしい経験をさせて頂いた事に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。



男子 U-16 日韓スポーツ交流 派遣・受入

派　遣：2012年9月13日（木）－18日（火）
韓国・大田（テジョン）市
親善試合
日本　28（12-10, 16-18）28　韓国
受　入：2012年9月19日（水）－24日（月）
東京都・北区
（味の素ナショナルトレーニングセンター）
親善試合
日本　34（17-6, 17-16）22　韓国

日本　28（12-10, 16-18）28　韓国

［戦評］西口・田里・康本・大谷・園田・伊舎堂・GK森脇のスターティングメンバーでスローオフ。こだわってきたコンタクト（DF）を相手レフトバックに園田が徹底し、韓国の得点が伸びない立ち上がりから田里・西口のカットインで得点し先行する。しかし韓国の3＝3DFに対し、ミスが多くなり追い上げられる。ミスが続きながらも固いDFでしのぎ、前半を12対10で折り返した。後半に入り、6-0DFにシステムをかえた韓国に対し日本は野村・大谷・西口のロングシュートでつきはなしにかかる。しかし、韓国バックプレーヤー陣の力強いミドルシュート、カットインで追いこされ、残り3分に1点のビハインドとなる。ここから大谷・康本のロングで追い越し、固いDFで粘るもタイムアップと同時の右サイドからのシュートを打ちこまれ、同点で試合終了となった。初めての国際試合において、1点の重みとアウェイの厳しさ等いろいろな経験ができた。

団長　志々場 修二

U16（男子）日韓交流を終えて

まず、はじめに日韓交流に際しご理解ご協力いただきました関係者の皆様に御礼申し上げます。特に受け入れの際の親善試合の共同開催を承諾していただいた関東学生ハンドボール連盟、そして当日の運営をしていただいた埼玉県ハンドボール協会の方々には心より感謝申し上げます。

2012年度U16（男子）日韓交流は、派遣9月13日から18日、受け入れ9月19日から24日の日程で行われました。派遣においては韓国大田市で、受け入れにおいてはANTC、親善試合は埼玉県三郷市で行いました。

U16は、初めての国際試合であるため、ハンドボールの競技力向上だけでなく、いろいろな経験を通じユース・ジュニアのカテゴリーにつなげていく意味で重要な役割をもっていると考えています。今回も国外へ行く際の準備・行動から意思統一し派遣・受け入れと臨みました。ハンドボールにおいては、この先継続してライバルとなる韓国との初めての試合ということで、ここで叩いておくことの重要性をチームで共通認識しトレーニングを積み親善試合に臨みました。

親善試合においては、韓国ラウンドではコンディショニングの難しさ等抱えながらのゲームとなり勝ち試合を引き分けで終えました。また国際試合におけるアウェイでの厳しさ等を経験しました。このすべての経験を教訓にし臨んだ受け入れでの親善試合では、スタッフ・選手が課題を克服しすばらしいパフォーマンスで快勝することができました。今後の韓国との戦いにおいては大きなアドバンテージとなったと思います。

また、雨の中多くの方々が三郷市総合体育館に駆けつけてくださり、その声援が大きな力となりました。

この日韓交流を経験してスタッフ・選手共に今後の課題を明確にすることができました。ユース・ジュニアのカテゴリーの際には大きく成長できるよう継続して努力していくことを確認し報告とさせていただきます。

監督　岩本　明

はじめに、日韓交流にあたりご尽力いただいた方々に心より厚く御礼申し上げます。

【派遣】

初めての国際試合を経験する選手には、ハンドボールだけでなく荷物の準備、空港での手続き等いろいろな指導をすることが必要なU16チームです。選手はあらゆることを皆で協力し臨むことができました。

派遣での親善試合にむけては、ディフェンスにおいての1：1の際のコンタクトにこだわって行いましたが、韓国バックプレイヤーのスピードとパワーについていけず、コートセンターからのロングシュート・ミドルシュートでの失点が多くなりました。しかし、オフェンスにおいて落ち着いて展開し、リードをしましたがタイムアップと同時にサイドシュートを打ち込まれ同点で終了しました。勝ち試合を逃した悔しさ、1点の重みを痛感し、そして国際試合で勝つ難しさをスタッフ・選手が経験し帰国しました。

【受け入れ】

受け入れでは、ANTCという環境面ではすばらしい場所でトレーニングを積み、親善試合に臨むことができました。派遣の際のコンディショニング、そして戦術面での教訓をいかし、トレーニングを3日間積み親善試合に臨みました。特にディフェンスにこだわっていくことで意思統一しました。親善試合では、多くの観客の中、入りは非常に硬く、シュートミスが続いたものの、こだわってきたディフェンスが機能し、失点をおさえ快勝することができました。

【最後に】

今回のU16は選手権ではなく交流でありますが、スタッフ・選手はいろいろな経験ができました。今後は、ユース・ジュニアのアジア選手権ではより厳しいトレーニングを積んでいかなければ「アジアの壁」を突破できないことは確実です。バーレーンで世界への切符を獲得したユース代表に続くことができるようスタッフ・選手一同努力し世界に通用する日本を目指し、日々精進していきます。

東京都協会所属　高橋 恭文、塚本　光

男子 U-16 日韓スポーツ交流親善試合を担当して
―アドバンテージの取りがいがあるハンドボールの展開―

私たちは、9月22日（土）に三郷市総合体育館で行われた『男子 U-16 日韓スポーツ交流親善試合』の審判を担当させていただきました。公式戦ではないものの、初の国際試合ということもあり、全国大会や学連では味わうことのできない緊張感の中で、多くのことを学ぶことができました。その中でも、特に「アドバンテージ」の適用について考えさせられる場面が多数ありました。

「３歩３秒のアドバンテージが認められる」―ハンドボールの魅力の一つはアドバンテージルールがあることです。アドバンテージルールの存在が、流れを止めずスピーディーかつダイナミックなハンドボールを演出します。反則やレフェリーの笛に遮られることなく選手は大いにプレーでき、観衆もハンドボールの魅力を堪能できます。レフェリーにとっても、アドバンテージを上手く取れるかが試合の流れのポイントになり、レフェリーの技量を分ける大きな要素ともなります。

ところで、レフェリーが意図的に「３歩３秒を認めない」ことがあります。例えば、オフェンス側選手のフェイントがディフェンスの正面に入り、ディフェンス正面でホールドした場合です。選手がコートの真ん中で３秒間も抱き合っている姿を誰も見たくありません。このように、次への展開が期待できない場合（プレーが死んだ状態）では、３歩３秒より早く笛を吹くことがあります。

また、捕まれたまま４歩歩く、捕まれたまま押し込む…などオフェンス側の反則があった場合も、直ちに笛を吹いて断ち切り、次への展開を促します。

また、ゴールキーパーがシュートを止め、そのリバウンドボールを拾って速攻に出そうとしている選手への反則も早めに介入した方が速攻に出やすいです。このような場合も、レフェリーはよりスピーディーな展開を促す演出のために３歩３秒を認めず、意図的に早く笛を吹くことがあります。

一方で、オフェンス側選手がディフェンスに捕まりプレーを止めてしまい、ディフェンス選手も力を抜いてしまう場面があります。きっとフリースローになるだろうと、選手同士が慣れあってしまうのでしょう。そして両者がレフェリーを見ます。これは、スピーディーなハンドボールの演出家たるレフェリーとしては非常に困ります。スピーディーなハンドボールを演出することがレフェリーの一義であるが、レフェリーの演出を逆手にとり、しかも慣れあって選手が止まってしまうのは非常に残念です。「笛を吹く」＝「試合を止める」＝「空気を変えること」ですので、できれば選手の邪魔をしたくありません。換言すると、笛をできる限り吹きたくないと言う事です。レフェリーは、選手が何とかしようとすることを評価・尊重して、邪魔することなく試合を遂行させていきたいと思っているからです。



そんな中、今回担当させていただいた試合の韓国選手に対する印象は、「一切の慣れあいがない！」、「慣れあいを逆手にとって動きだす！」の二つであり、よい驚きでありました。韓国のオフェンスでフェイントをした選手が０歩もしくは１歩目で日本のディフェンスに捕まった場面です。国内の高校生・大学生は、この状況では諦めてしまい「慣れあう」場合が多くありますが、韓国の選手は、一旦力を抜いてディフェンスに対してまず諦めた振りをし、ディフェンスの慣れあいや油断を誘い、ディフェンスが力を抜いた瞬間に、残りの２歩・２秒を大いに利用して再度動きだします。一度力を抜いてしまったディフェンスが再度動き出すことは難しく、あっさり抜かれたり、次のプレーへ展開されたりします。アドバンテージルールと、３歩３秒の権利を最大限に活かし、とことん点を取りにいこうとする姿勢、勝とうとするメンタリティーが非常に嬉しく、レフェリーとして楽しい瞬間でもありました。一方、日本チームは、正面からのディフェンスの権利（曲げた両手で相手を保持し続けること）を十二分に活かし、アグレッシブ且つハードにディフェンスし続けました。このプレッシャーや、アクティブ且つハードなディフェンスが韓国を圧倒し、試合の勝因ともなりました。正面から思い切ってハードにディフェンスする日本と、捕まっても諦めない韓国。細かいミスは多々あったかもしれませんが、アドバンテージの取りがいのあるゲーム展開の試合でありました。

最後に、改めて審判の楽しさや奥深さ、アドバンテージの魅力を考えさせる機会を与えてくださった両国の選手や、日本協会関係各位に心より感謝を申し上げます。

機関誌送付先各位

機関誌：チーム内回覧のお願い（機関誌専門委員会）

協会機関誌は、大会報告を始め種々の協会情報を掲載し年８回発行しております。
送付先は、各チーム登録の監督・指導者等となっておりますが、指導者のみならず、選手にも読んで戴きたい記事も在りますので、チーム内の選手にも是非回覧戴ければと存じます。

第 20 回
日・韓・中ジュニア交流競技会

期　　日：2012 年 8 月 23 日（木）－ 29 日（水）
　　　　競技は 25 日（土）－ 27 日（月）の 3 日間
競技会場：韓国・光州広域市・「念珠体育館　Yeomju Gymnasium」
最終順位：
　［男子］優勝：韓国　2 位：日本　3 位：光州選抜　4 位：中国
　［女子］優勝：韓国　2 位：日本　3 位：光州選抜　4 位：中国

総監督　船木 浩久（全国高体連専門部委員長）

本競技会は、1993 年日本の福島県で第 1 回大会が開催され、今回で記念すべき 20 回目となりました。今回は韓国・光州広域市において 8 月 23 日（木）から 29 日（水）まで開催されました。日本選手団は 11 競技に 244 名、ハンドボール競技からは全国から選抜した選手 28 名、高体連専門部から役員 5 名の 33 名が参加しました。

8 月 22 日（水）は品川プリンスホテルに夕方集合し宿泊しました。23 日（木）は羽田空港から金浦空港へ、金浦空港から宿泊先の光州広域市にある湖南大学学生寮までのバス移動約 4 時間は大変長く感じました。24 日（金）は午後から練習、夕方、朝鮮大学校講堂で開会式、オープニングの太鼓の演奏とテコンドーの演武は素晴らしいものでした。終了後、ラマダプラザホテルにて監督審判会議が行われ、翌日からの試合方法・ユニフォーム等の確認をしました。

8 月 25 日（土）からの試合は、念珠体育館を会場に日本・韓国・中国に開催地光州広域市代表チームを加え 4 チームの総当たりで行われました。男女とも一日目の韓国には敗れましたが、二日目の開催地代表、三日目の中国に勝利し、対戦成績 2 勝 1 敗で韓国に次いで 2 位になりました。ただ、男子が第 15 回中国・広西チワン族自治区（桂林市）大会から続けていた連覇（5 連覇）が途切れた事は残念です。なお、試合結果については、監督・選手から別途報告があるので省略します。27 日（月）は、競技終了後、朝鮮大学校講堂でフレンドシップ交流会が開催されました。韓国で人気の女性グループや男性グループが歌とダンスのパフォーマンスを披露し、会場は興奮の坩堝となりました。また、各国から 3 チーム、計 9 チームが出し物（歌やダンス）を披露し、交流会を盛り上げました。なお、日本代表として女子ハンドボールチームもダンスを披露し、全体で 2 位の好成績を収めたことも付け加えておきます。28 日（火）は台風の接近で予定通りの見学・研修はできませんでしたが、午後からは繁華街でそれぞれの時間を過ごしていたようです。29 日（水）朝、湖南大学学生寮を出発し、夕方帰国しました。

今回、日本代表として参加した選手達は、男子、阿部富夫監督・大房重則コーチ、女子、田中宏明監督・吉兼敦生コーチ指導のもと、如何に戦う集団になれるか、限られた短い時間の中で戦術や個人の役割等を確認しました。その結果、生活態度等も含め、日を追うごとにまとまりのある集団になりました。韓国には敗れましたが、日本代表として恥ずかしくない戦いをしてくれたと思っています。今後は、この貴重な国際大会の経験を活かし、次の舞台で活躍してくれることを期待しています。

大会の参加に際しては、4 月に大阪で選考会、8 月 20 日から 2 泊 3 日で男子は NTC、女子は佼成学園女子体育館でそれぞれ直前合宿を行い、多くの方々から多大なるご支援とご協力を賜りましたことに心から感謝を申し上げます。今後とも、全国高体連活動へのご理解とご支援をお願い申し上げまして大会参加報告と致します。

男子チーム監督　阿部 富夫

選考会は、4 月 21 日（土）～ 22 日（日）大阪府堺市家原大池体育館において行いました。各ポジションの専門的技術、俊敏さと突破力、ハンドボールへの取り組む姿勢等を体力測定、ゲーム、面接を通して、男子 52 名の参加選手の中から代表選手 14 名を選考しました。

日・韓・中ジュニア交流競技会へ向けての直前合宿を 8 月 20 日（月）～ 22 日（水）NTC で行いました。高体連男子強化委員の大房コーチの指導により、日本代表としての心構え、直前合宿を行う意義、韓国・中国戦に関する戦術、個人・チームの課題、課題解決の方法等が明確なものとなりました。U 19 との合同練習、シミュレーションゲーム、練習試合、そして日本体育大学との練習試合により、短期間で想定した課題を解決することができ完成度の高いチームとなりました。

8 月 22 日（水）は、品川プリンスホテルに宿泊し、23 日（木）に韓国光州広域市に向け出発、24 日（金）は、念珠体育館で調整を行い、その後朝鮮大学校講堂へ移動し開会式に参加しました。

■8 月 25 日（土）対韓国戦

コートでプレーする選手、ベンチが一体となって戦うことを再確認しコートに入る。攻撃チームが防御チームへ歩み寄り握手、そして試合が開始された。落ち着いた滑り出しであった。攻防の切換も滑らかで、課題であった防御も、常にボールに対して守る動きができていた。また、リズムに乗って攻撃し、センター吉野、左 45 比嘉、右 45 上本が順調に得点していった。2 点リードする流れで 20 分を迎えた。吉野が退場となり、さらに比嘉も退場。攻防のリズムが完全に途絶え、残り 10 分間で 7 失点、14 対 19 で前半を終えた。後半は、開始早々 4 点差にするが、そこから「得点するが守れない」という膠着状態が続いた。残り 10 分から 5 分の間に 4 点差から 3 点差にする機会が何回かあったにも関わらず、流れを戻すことができずに 33 対 38 で試合を終える。

【得点】吉野 14 点、上本 4 点、宮里 4 点、野口 4 点、比嘉 3 点、田辺 3 点、杉岡 1 点

■8 月 26 日（日）対光州戦

退場者を出してもリズムが途絶えないようにすること、動いて位置を取り続けること、ボールに対して防御することを意識してコートに入る。前半は、ボールに対して防御するプレーが機能し、警告は 3 回であったが、攻防のリズムも良く 11 対 11 で折り返すことができた。後半に入り一進一退の攻防が続いたが、10 分過ぎから光州チームに疲れが見え始め、攻防の切換に隙がでてきた。その隙をねらうように、両サイド杉岡・田辺が大事な場面で本来のパフォーマンスを見せ得点し、チームのムードも一気に上がった。後半は終始主導権を握り、32 対 29 と楽に逃げ切ることができた。

【得点】杉岡 11 点、吉野 7 点、比嘉 4 点、宮里 3 点、田辺 3 点、上本 2 点、古家 2 点

■8月 27 日（日）対中国戦

機動力を生かし、速さを主体に攻防を繰り返し、中国の体力を消耗させ主導権をとることをねらい、高い位置での防御ができる野口をトップに、サイドは下岡・中花を先発とした。ボールに対して位置を取る動く防御、防御から攻撃への素早い切換等、順調な滑り出しで、ボールも人もよく動き、前半 24 対 13 と思い通りの展開であった。後半も、気を抜かず一人一人が自分の持ち味を生かし、速い展開のゲームを意識してコートに入る。一人一人が集中して、ハンドボールを楽しみ、47 対 26 で試合を終えた。

【得点】吉野 9 点、上本 8 点、中花 7 点、比嘉 5 点、下岡 5 点、木村 5 点、笹川 3 点、野口 2 点、杉岡 1 点、田辺 1 点、古家 1 点

フレンドシップ交流会が 19 時 30 分から朝鮮大学講堂で行われました。各国 2 チームがステージで出し物を披露したり、ステージで踊ったり友好を深め、楽しいひとときとなりました。スポーツ交流会の目的が、達成されたと感じることができました。

8月 28 日（月）は見学・研修の予定でしたが台風の影響で変更になり、昼食後はショッピング、夕食で終え、29 日予定どおり帰国し、羽田空港で解散となりました。

選手選考会に御協力頂いた各高校の顧問の先生方、大阪府の先生方、直前合宿で生活全般からハンドボールの指導等細部までご協力頂いた NTC スタッフの田中さん、山口さん、大城さん、市来さんには大変お世話になりました。U 19 の滝川・内記両コーチ、日体大の松井先生には、課題解決の具体的方法や精神面の強化等、分かり易く指導して貰いました。誌面をお借りしまして、感謝申し上げます。選手にとって、選考会・2泊3日の直前合宿・そして韓国での交流競技会は貴重な体験となりました。選手のみなさんには、ハンドボール界を牽引していく人材になることを期待します。

男子チーム主将　古家 敦志（桃山学院高校）

今回このような貴重な経験をさせて頂き色々な事が学べました。違う国で試合をするということが、どれだけ大変な事なのかということが良く分かりました。

試合の時には、審判の笛がとても気になりました。数年前、日本代表のオリンピック予選でのクウェート戦を僕はとても印象に残っていて覚えています。そこであったのは『中東の笛』と呼ばれる中東の国への有利な笛を吹くというものでした。ノーファールと思えるプレーが、結果的に退場になり、本当に辛かったです。そのような事もあり、国際試合はとても大変な事だと思いました。それを今回自分の肌で感じる事になりました。完全アウェイの中で笛が流れるという事が予測していたにも関わらず自分達がそれに対応出来なかった事がとても悔しいです。すこしでも審判に「あっ」と思わせてしまうほどのプレーが出せれば、大きく流れが変化したかもしれません。どのくらいのファールならカードが出ないのかという事など、「ルール」の大切さや重さについて、自分で考えなければならなかったと思います。国際試合の大変さを改めて感じる事が出来ました。

東京で直前合宿で合流し、練習を始めるとそれぞれ違う学校の集まりなのでプレーの違いに戸惑う事もあったけど、自分達で各チームのセットプレーなどを出し合い練習し、それが試合で通用した時には本当に嬉しくなり、練習試合を重ねていくごとにチームが一つになって行くのが実感出来て本当に楽しかったです。違うチームが集まってハンドボールをするという経験は滅多に出来ない事なので、本当に良い経験になり良かったと思います。

短い期間でしたが日中韓のメンバー、船木先生、阿部先生、大房先生ありがとうございました。また、NTC でお世話になった U19 の滝川先生、内記先生、山口先生、ユースの皆さん、日体大の皆さん本当にありがとうございました。今回の経験を生かしこれからも頑張っていきたいと思います。

男子チーム選手　吉野　樹（市川高校）

2012 年 8 月 23 日、阿部監督、大房コーチと共に船木 JAPAN は韓国へ出発しました。私個人としては、国体予選で肩を痛めていたこと、慣れない長期滞在、初めての海外など、いくつかの不安と緊張を抱えての出発でした。

初戦は韓国。日本国内とは違う韓国の審判に戸惑い、場に慣れていないこともあり、なかなか日本のペースに持っていけず、調子の出ないまま、33 対 38 のスコアで敗北しました。その晩のミーティングでは細部にわたっての見直しを行い、翌日光州戦へ臨みました。光州は個人能力が高く、監督やコーチから接戦になるだろうと言われた通り、激しい点の取り合いとなりました。前日の敗北、ミーティングでの反省が活き、ココで日本代表が、チーム一丸となれたように思います。シーソーゲームが続いた後、32 対 29、最後は日本が競り勝つことが出来ました。

最終の中国戦は大柄な選手が多く圧迫感はありましたが、3 試合目とあって、会場の空気やジャッジにも慣れてきた自分達は、のびのび試合をすることが出来たと思います。47 対 26 で快勝でした。

全試合終了後にあった交流会。各国の選手たちが余興をし、韓国の歌手やダンサーなども来て楽しい時間でした。どの国の人も言語は違うものの話してみると（勿論、通訳有りですが）親近感が沸きました。また、印象的だったのは韓国の料理です。殆どの料理が辛く、口に合わず、一番美味しかったのは馴染みのある韓国のりでした。それでも韓国の焼肉を食べに行ったり街を回ったりと貴重な体験が出来たことに満足しています。

この度の日韓中ジュニア交流会は、出発前に感じていた不安を一掃し、沢山の感動と喜びを与えてくれました。各国のプレイスタイルの違いや同じスポーツを追求する仲間とのふれあいなど、学んだことは数え切れません。今後も機会があれば、他の国の選手とも対戦してみたいです。多方面から支えてくださった先生方や保護者の方々、共に励まし合ったチームメイトのおかげで、素晴らしい経験をすることができました。この経験を活かして新たな目標を胸に、大学でも頑張っていきたいと思います。

女子チームコーチ　吉兼 敦生（華陵高校）

第 20 回日韓中ジュニア交流競技会（韓国・光州広域市）にコーチングスタッフとして初めて参加させていただきました。

今年度は第 4 回女子世界ユース選手権と日程が重なり、4月の選手選考会から課題の多い年でした。8月にある岐阜国体ブロッ

ク予選の日程が、世界ユース選手権への選手派遣の関係でまちまちでした。そのため、事前合宿が組めず出発直前の延べ二日間だけという、非常にタイトな日程でのチームづくりを余儀なくされました。全国から選抜された選手で構成され、所属チームならではの文化をこのチームに要求するのではなく、このチームの文化を皆で創っていこうとスタートしました。

スキルアップや戦術トレーニングをする時間もなく、練習試合をしながらチームとしての約束を落とし込んでいく方法をとりました。また、ゲームの中ですぐに効果を上げられることと時間をかけて獲得することに整理し、前者を強調した声かけで意識づくりをしていきました。今自分の持っている能力をゲームの中でどれだけ表現できるのか、ミスを恐れずチャレンジする。スキルの部分ではなく、頭で意識するだけでできることは何かを強調することでシンプルに強い個を引き出したかったのです。また、人間関係が少しでも早くできるようにコミュニケーションの必要性を話しました。コンビネーションで攻めるとき、DFでのラインコントロール、GKとのコンビネーション等コミュニケーションで解決できることがあることを理解させました。試合を重ねるごとにDFを中心にいくつかの約束事が機能してくるとFBも出始め、私たちのめざすゲーム像も見えてきて、チームの戦い方も共有できていきました。

ある程度の手ごたえを感じ大会に臨みましたが、結果は韓国に敗れ2勝1敗で2位と少しだけ残念な結果でした。しかし、選手たちが自分の足りないところを発見し、次のステージにつなげたい思いを語ってくれました。また、このチームでの充実した活動に感謝の言葉を言い、涙ぐむ選手もいました。私は彼女たちが将来大きく羽ばたくためのきっかけをつかんでくれた意義深い大会だったと確信しています。

大会期間中、競技面では韓国体育協会、韓国ハンドボール協会を始め、多数のスタッフの心の行き届いた運営でストレスなく試合に臨めました。宿舎も非常に衛生的で快適に過ごせましたが、食事の面で韓国のメニューオンリーだったため、合わない選手がいたようです。普段から恵まれた食生活を保障された日本人に、そのあたりのたくましさが必要だと感じました。

最後に直前練習で会場をお世話いただいた佼成女子高等学校を始め、練習試合でご配慮いただいた東京女子体育大学・日本体育大学・東海大学の女子ハンドボール部のみなさんに心からお礼を申し上げます。

女子チーム主将　岩崎 成美（華陵高校）

私は今回、日中韓ジュニア交流大会に参加してみて多くのことを感じました。

まずは体格の差です。特に、韓国からは学ぶことがたくさんありました。一対一の強さやあたりの強さ、また、ボールへの執着心などで日本は負けていたと思います。しかし、日本の器用で考えてやるプレーは十分に通じるということも感じることができました。個人的にもフィジカルで負ける場面が多かったのであたり負けしない体を作っていくことが大事だと感じる試合でした。

次に、コミュニケーションの重要さです。全国の高校から集まった選抜チームだったので、各高校の考え方、文化が大きく違いました。今できること、できそうなことを、監督とコーチを中心にミーティングしていきました。その時に必要だったのがコミュニケーション能力でした。



生活面から学んだことは、韓国人や中国人は乱暴だなというイメージがあったけれど、実際に交流してみると、日本語を使って話しかけてくれる人や試合前に応援の声をかけてくれる人がたくさんいて、イメージと全然違い良い印象を受けました。実際に関わってお互いの国について知ることも大切だなと感じました。

今回私は、日本団員の方だけでなく韓国や中国人といった普段関わることのできない人と交流するという貴重な経験が出来てよかったです。この交流会で学んだ経験をこれからの練習や生活に活かしてさらに成長していきたいと思います。

女子チーム選手　永田 美香（四天王寺高校）

8月23日から29日まで、韓国の光州で行われた日韓中ジュニア交流大会に参加させて頂きました。

私は外国のチームと戦うのは今回で3回目になります。試合をしてみて、やはり日本は韓国、中国とくらべると身長も小さくパワーもありません。個人技も強く差はありましたがチームワークではどこのチームにも負けていませんでした。韓国や中国のチームは、ボールを追うのをすぐに諦めていました。それに比べて日本はどうにかみんなで動き1点を取ろうとしていました。相手の選手がどんなに大きくても自分達から立ち向かえば自分達の流れがつかめるのだとわかりました。試合では韓国の審判の判定がおかしいときがありました。国際試合はそんな中で戦わないといけないので、国際試合の戦い方が分かりました。3試合と少ない試合数だったけれど、良い所も悪いところも出たと思います。

交流大会に参加して、いろんな人のプレーを見て自分の体で体感してとてもいい経験になりました。2勝1敗という結果でしたが、勝った試合も負けた試合も私達にいい影響をあたえたと思います。試合以外にも韓国の歴史や文化にふれ、言葉の通じない中で生活しにくい時もありましたが楽しく過ごすことができました。

短い間でしたが、田中先生、吉兼先生の元でプレーができたこと、そして14人でプレーができたことは、私にとって、とても大切な思い出です。チームに戻れば、みんなライバルになってしまうけれど、同じハンドボーラーとしてこれからも成長し続けていこうと思います。短い間でしたが本当にありがとうございました。

（PS）オリンピックの年に日本のハンドボールが参加できなかった淋しさは、今でも強く心に残っていますが、私達が中心となって必ずオリンピックに行きます。

～日本代表監督支える力とは～

企画・広報委員
早川　文司

Free Throw（フリースロー）

日本代表の男女監督が決まった。といっても、ようやくとの言い方がいいのかも知れない。ロンドンオリンピック世界最終予選が終わったのが男子は4月、女子は5月。そのあとジャパンカップ、ヒロシマ国際大会が開かれ、いずれも「日本代表」として参加したが、実態は次世代の若い選手で編成された。「日本代表」の呼称がいいかどうかは別の機会に譲るとして指揮官は“暫定監督”としてベンチを預かった。

またもオリンピック出場を逃した結果を深刻に思うなら、いち早く監督続投の方針を出すなり、次期監督を決めるべきではなかったかと思う。とくに女子は年末にアジア選手権を控えていただけになおさらである。世界最終予選後、いろいろな人が取りざたされていたようだが、時期がずれればずれるほど決めるのは難しくなってしまうことはよくある。

どういう経緯かはともかく、新しい日本代表監督は決まった。2016年のリオデジャネイロオリンピックへ向けて走り出すことになった。短・中・長期の強化ビジョンを早くつくり、スタートすることが求められる。「まだ○年ある」―では、早い流れが加速する世界のハンドボール界には置いてきぼりにされかねない。

国内合宿を含め海外とのテストマッチなど可能な限りあらゆる手段で強化を図り、まずはアジアを制することが大切である。

強化に関してよく懸念されるのが、財政面である。「カネがあれば…」は耳が痛くなるほど、これまで聞かされてきた。しかし、本当にオリンピック出場を願うなら4年間（実際には3年程度だが…）賄える強化費を工面するのが日本協会の責務ではなかろうか。

「カネはないが、オリンピックには出場したい」は、かつてのアマチュアリズムのようで、現代には通用しない。資金難と闘いながらオリンピック出場を果たしている競技団体は実際に存在する。でも、それだけを言い訳にしていては、なおさら世界から置いていかれる事態になりかねない。

心の底から「オリンピック出場」を考えるなら、最大限の力を注いで資金確保に努めるべきではないかと思う。もしも、そうなれば選手もいっそう責任感を感じ、目標に向かって最高のパフォーマンスをする決意をいっそう示してくれるはずだ。代表入り争いも激化するだろう。選手が意気に感じるバックアップを果たしてどのくらいしてきたか。実際の行動力で示すことが必要ではないだろうか。

経験豊富な指導歴を持つ新代表監督が戦力アップに専念できる環境づくり。これがリオにつながるかどうかの分かれ道ではないだろうか。それには日本協会の英断にかかっていると言っても過言ではないだろう。

NTSブロックトレーニング報告【北海道】

名　　称	ナショナル・トレーニング・システム（NTS）　北海道ブロックトレーニング					
実施期間１	2012年8月25日～8月26日					
開催場所１	函館大学　体育館					
参　加　者	スタッフ	4名	デモンストレーター	20名	補助指導者	14名
	高校生	10名	中学生	11名	小学生	8名
					合計	67名

1．成果

・体幹トレーニングが多かったので、その仕組みが理解できたことが良かった。
・ポストの育成がいままであまりなかったので（45やセンターが多かった）、参考になるという声が多かった。
・パスキャッチなど育成資料として参考になるものが多かった。
・年々DVDや教本の質が向上している。また指導しやすいように編集されており、質の向上がなされている。

（1）開会式の様子




（2）ウォーミングアップ
（体幹トレーニング含む）




（3）パスキャッチ



2．課題

（1）北海道ブロックとしてのインストラクターの育成が急務である。
（2）地理的条件により、時間的な制約が発生する。
（3）前項に関連して、全ての地域に指導方針・トレーニングを伝達することが困難である。

ＮＴＳブロックトレーニング報告【東海】

東海ブロック技術指導委員　片山　聡

日　時；平成24年8月25日（土）　10：00～16：30
26日（日）　9：00～16：30
場　所；三重県鈴鹿市民体育館
参加者；小学生　男子12名　女子9名
中学生　男子16名（内2年生4名）　女子12名
高校生　男子10名　女子9名
引率教員　41名　NTS委員　11名
講　師　田中俊行
インストラクター20名（HC名古屋選手）
（オフェンス編）W－UP、ファンダメンタルトレーニング（着地技術・ステップワーク）、パス、シュートトレーニング、3：3　サイド・バック・ポスト、両バック・センター
（速攻編）3人ランパス、2：1のシュート、3人ランパスから2：1、5人ランパスから3：2、連続3：3
（ディフェンス編）W－UP、DFステップトレーニング、DFトレーニング、3：3、1：1、横2：2、横3：3

今年は三重県で中高校生が2日間で、小学生は1日で実施し、初の試みとして、中学2年生も参加した。また、この講習では選手育成のためだけでなく、優秀な指導者育成も目指した指導をしていただいた。

講師から最初に話があったのは、「一貫性」を持った指導体制作りであり、チーム戦術の前に基礎戦術、基礎戦術の前に個人戦術があり、チーム戦術は各チームで違いがあっても、個人戦術での一貫性をめざすということであった。

東海ブロックの場合、小中でのハンドボール経験値が各県で開きがあり、個人戦術が乏しい県からしっかりと身に付いている県と分かれているのが現状である。ゲーム形式になると途端にその差が現われるが、今回のファンダメンタルムーブメントのステップワーク等を行うとそんなに大きな開きを感じなかった。これは、経験値がないだけで運動能力の高い選手がハンドボールを始めているとも考えられるし、その逆で個人戦術の高い選手の中にもまだこれらの動きが身に付いていないとも言える。いずれにしても、身のこなしの部分になるので、ここを統一していけるとより個人戦術はあがると思われる。

オフェンス編のキーワードとして、「Total Mobility」をあげ、攻撃での連動性を高めていくことが重要であるという説明があった。パス練習、シュート練習においても、その連動性を意識したメニューが多く、パスの後の動きやもらう前の動きを加えたものが中心であった。ここには、経験差がみられ、経験者ほど素早い反応があったが、浅いものほどボールが離されてから反応している場面がみられる。また、ボールの投げ方（さばき方）に差がみられ、身のこなしを含めて、パススピード、リリースまでのスピード、判断のスピード等大きく違っていた。オフザボールの時が重要であるという講師の指摘どおりであり、もらう前の判断ポイントやもらい方のタイミングなどがもっと具体的に示されるともっと個人戦術が向上するように感じた。

速攻編では、「フリースペースでボールをもらえるようにする」ことを意識させていた。瞬時にそのスペースを見つける視野とボールマンとのタイミングなど習得させたい戦術がいくつかある。今回は、ゲーム中ではなく、広いスペースの中での状況判断を経験させていく内容なので、判断自由度が大きい分、色々なアイデアが出てきていいと思われる。その自由さを大切にすることが、将来色々なチーム戦術に対応できる力になると考えられる。そのためにも、緩やかな約束事をどのようにおき、何に着目したプレー判断をさせるのかというポイントを示したり、選手に自由に発想させるための工夫が必要になる。

ディフェンス編においては、「連動すること」と「ラインコントロール」を意識するよう説明があった。数的不利な状況でのDFの対応力を重要視しており、ボールと逆のDFがどれだけ連動できるかを意識したメニューであり、これはどのチーム戦術においても大切なスキルである。クロスアタックの時に相手のパサー、バックプレーヤー、サイドを観察する視野の広さと駆け引きでプレーを限定させる位置取り等、積極的に取り組ませ、継続していく必要があると感じる。

今回の研修の中で色々なポイントを示されたが、経験値に差があるので、それぞれの県またはチームで今一度重要となるポイントを整理し、継続して指導していきたい。また、選手のみならず、各県の指導者に対してもしっかりと伝達していくことが大切である。

最後に講師をしていただいた田中俊行氏だけでなく、指導にあたっていただいたHC名古屋の選手が分かりやすく指示して下さったこと、深く感謝申し上げます。



ＮＴＳブロックトレーニング報告【東北】

東北NTSブロックトレーニングについて

東北運営委員長　高山 重雄

初期のNTSブロックトレーニングは持ち回りで、福島県石川町、秋田県湯沢市等で開催されました。その後、集まりやすい地域ということで、岩手県協会の協力により岩手県花巻市に定着しております。

東北協会では、NTSブロックトレーニングを通して、東北全体のレベルアップを図ることは勿論のこと、東北出身者でオリンピックに出場された矢内浩氏（福島県出身・大崎電気GM）、首藤信一氏（岩手県・元大崎電気監督）、全日本で活躍した武田亨氏（山形県・大同特殊鋼）、上町史織氏（岩手県・北國銀行）に続く選手の発掘・育成に取り組んできました。今年は、９月にバーレーンで開催された男子アジアユース選手権大会に選手として藤勢流くん（山形県北村山高３年）、齊藤湊くん（岩手県不来方高３年）、安部竜之介くん（岩手県不来方高２年）、コーチとして内記徹先生（岩手県不来方高教諭）が出場し、惜しくも優勝は逃しましたが堂々の２位になり、来年開催される世界大会の出場権を獲得するという快挙を成し遂げました。世界大会での活躍も期待したいと思います。

今年度は、９月８～９日に花巻市総合体育館において開催されました。小学生32名、中学生37名、高校生33名、指導者20名、インストラクター６名、スタッフ７名、計135名が参加し、保護者を含めると170名ほどになります。

東北は南北に長く、福島県から参加する選手、指導者は片道３時間以上かけて花巻に来ていただき、大変なご苦労をおかけしております。九州も同様に移動に時間がかかるため、泊を付けていると伺っております。

問題点としては、ここ数年、地区大会、学校行事等で東北六県全カテゴリーが集まることができなく、日程の検討を重ねてきました。そこで、東北では２回目となりますが、来年度から小中学生と高校生を分けて開催することとしました。インストラクター、各県運営員の先生方にはご苦労をおかけしますが、多くの児童、生徒に参加してもらい、子どもたちの可能性を高めるためにも協力をお願いします。

もう一つの問題点は、引率指導者以外の指導者の参加があまりみられないということです。私が、東北大会等で常に言っていることは、指導者が勉強しないと選手の能力を引き出せないということです。せっかくハンドボールを選んでくれた子どもたちに申し訳ないということです。各県協会財政難であることは十分承知しておりますが、熱意のある指導者を育てるのも県協会の務めだと思いますので、指導者の派遣をお願いします。

最後になりましたが、NTSシステムの発展が悲願であるオリンピック出場に繋がると思っております。地方協会は協力を惜しみませんので、今後も宜しくお願いします。







第５回男子アジアユース選手権準優勝、世界選手権出場権獲得

男子ユースキャプテン　助安 功成

私たちは30年ぶりに世界選手権への出場権を獲得しました。世界選手権出場を決めることができた最も大きな要因は、近森団長、滝川先生、山口先生、飯田さんをはじめとして、選手団全員が意思統一し、試合に臨めたことだと思います。私たちは「今やらねば誰がやる。俺がやらねば誰がやる」を合い言葉に立ち上がり、応援してくださる沢山の方々への感謝の気持ちを忘れずに戦い抜きました。その結果が「世界選手権出場」という形になったのだと思います。私はこのメンバー、スタッフとともに本気でアジアと戦うことができて幸せでした。そして、このような機会を与えていただいたことに心から感謝しています。

今、私たちの目前にあるのは「世界」です。より一層練習に励み、メンバー全員がもっと成長して「世界」と戦いたいです。そのためにはまずフィジカルを強化し、もっともっと走れるようにならなければなりません。近森団長は私たちにいつも「休む暇はない。“Step by step” 今を大切にして日々成長し続け、前進しなければならない」とおっしゃっています。私たちはその言葉に従い、世界選手権でもよい結果が残せるよう、限られた日々を大切に、課題の克服に努めたいと思います。私たちを応援してくださる方々の期待に応えられるよう、選手一丸となって一生懸命頑張りますので、これからもよろしくお願いします。

ぎふ清流国体に参加して

岐阜県ハンドボール協会　杉山 寛政・各務 宗孝

私達ペアは、10月5日（金）～9日（火）に飛騨高山ビッグアリーナをメイン会場に、高山市・飛騨市・下呂市で開催されたぎふ清流国体に参加させていただきました。

地元での国体開催に向け、岐阜県から２ペア以上のエントリーをしたいとの県協会の意向から、私達は平成１９年にＡ級ライセンスを取得し、その後各種全国大会等に参加させていただきながら、審判技術の向上を図って参りました。この間、前日本協会審判長の植村彰先生、現日本協会審判長の藤井俊朗先生、審査指導委員長の越田義昭先生、東海協会審判長の楓健児先生、県協会審判長の加藤元規先生方をはじめ、諸先生方からご指導をいただき、目標であったぎふ清流国体にエントリーしていただくことができました。お世話になった諸先輩方にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

大会前日の審判会議では、藤井審判長から交代地域の管理について、許される行為・許されない行為、段階的罰則の基準など映像を交えて説明をしていただき、翌日からの試合に向けて気を引き締めることができました。

競技一日目は、成年男子の福井県対兵庫県を担当させていただきました。普段は高校生の指導をしているため、成年のプレーを見るのは久しぶりでありましたが、大きなミスもなく吹き終えることができたのではないかと思っております。この日の全試合が終了した後、担当のレフェリー４ペアが集まり、会場でのミーティングを行いました。アドバンテージについて、「オフェンスが“死に体”になっている状況では、早めにフリースローを判定することにより、無駄なディフェンスのファールをさせないようにしていこう」とのプレーを予測した高度な内容がありました。また、宿舎に帰着後すぐに全体のレフェリーミーティングが行われ、各会場の反省点等を共有でき、翌日の審判に備えることができました。

二日目以降は、少年男子の試合を担当させていただくことになりました。試合中には、選手から判定基準について質問を受けました。選手が判定基準に合わせてプレーしようと協力をしてくれたこともあり、スムーズに試合を進めることができたと思っています。全国大会ともなると選手の意識も高く、選手と審判がお互いの立場を尊重し合うことで、よりレベルの高いゲームが創られるのだと実感した瞬間でした。

最終日には、少年男子３位決定戦を担当させていただくことができました。藤井審判長から「普段通りの笛を心がけ、気負いの無いように」とのアドバイスをいただき、安心して試合に臨みました。

このような機会を与えてくださったことに大変感謝しております。また、トップレフェリーの家永・福島ペア、浦川・石崎ペアをはじめ、全国各地から来られた審判の方々からの貴重なアドバイスやチーム役員である埼玉県の岩本明先生、山口県の倉谷康彦先生、大分県の冨松秋實先生にもご意見をいただくことができました。ありがとうございました。今大会の経験を今後の審判活動に活かしていきたいと思っております。



平成24年3月10日～11日、駒澤大学において第10回ハンドボールコーチング研究会が開催されました。本研究会は、全国指導者が自身の経験や・知見を持ち寄り、実際の現場で有用な情報を共有する機会として位置付けられています。
ハンドボールコーチング研究会の発表につきまして、本誌で報告する運びとなりました。
今号は原史織（筑波大学研究生）「オランダハンドボールウィークにおけるゴールキーパートレーニング」及び中原麻衣子（筑波大学大学院）「大学女子トップチームにおける攻撃力および防御力の評価基準の作成」を報告させていただきます。

(財)日本ハンドボール協会指導委員会研究部会　舎利弗　学（学校法人福島高等学校）

オランダハンドボールウィークにおける ゴールキーパートレーニング

原　史織（筑波大学研究生）、山田永子、河村レイ子、會田　宏（筑波大学）

キーワード：ゴールキーパー、コーディネーション、Agility トレーニング

【はじめに】

日本国内においてはゴールキーパーに関する指導理論は、十分な体系化がなされていない。指導者がコートプレイヤー出身の場合が多く、専門的なゴールキーパーのトレーニングを行うことが難しい。今回筆者は2011年12月27日から12月30日まで開催されたオランダのハンドボールウィークに参加し、そこで行われていたゴールキーパーのトレーニングセッションを受けてきた。ここではその内容を紹介し、実践現場での指導の一指針となる基礎資料を提供する。

【ハンドボールウィークの概要】

ハンドボールウィークとは、オランダラールテ市で開催されているハンドボールイベントである。午前と午後にポジション練習、チーム練習、合同練習等を行い、夜にゲームを行う。今回はオランダとドイツのユース・ジュニアチームやクラブチーム等が参加していた。ゴールキーパーのトレーニングセッションはキーパートレーナーであるトーニオ氏が担当した。トーニオ氏は、27日と28日の2日間にわたり合計6つのテーマを設け、トレーニングのねらいを説明をしながら参加した一人ひとりのゴールキーパーに丁寧にアプローチしていた。

【トレーニングメニュー】

1．フリーアップ　5分

ランニング、軽いフットワーク等

2．コーディネーショントレーニング

ここでは上半身と下半身のバランスやキーピングを意識した動きづくりがねらいとされていた。

常に手を上げ上体を起こし、腰を安定させた状態で一つひとつの動きにおいてキーピングを意識した緩急の使い分けを重視していた。

（1）上半身と下半身のバランス

常に手を動かしながら股上げ、後ろ蹴り、片脚ジャンプ（前後）等

（2）風船を使ったトレーニング

上にはじきながら股上げで前進、上にはじきながら開脚・閉脚して前進等

（3）キーピングを意識した動きつくり

横方向へのジャンプ、前進しながらのキーパー体操、前後左右のランジ

3．体幹トレーニングとストレッチ

ここではゴールキーパーに必要な柔軟性や動きの軸となる体幹を強化することをねらいとしていた。

（1）




（2）


（3）


（4）



等

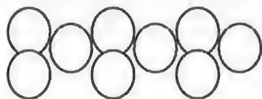
4．Agility トレーニング

ここでは接地時間を短くすることを意識しながら、動きに回転や反転などのコーディネーショントレーニングの要素も

加え、敏捷性・ボディーバランスを養うことをねらいとしていた。

（1）ミニハードルを用いたトレーニング
片脚股上げ、片脚横→前、片脚脚上げ、脚の入れ替え、両脚ジャンプ

（2）チューブ（輪）を用いたトレーニング
①両脚・片脚ジャンプ、回転動作、ボールを扱いながら



②股上げ横、3歩前→1歩後、片脚ジャンプ前、片脚ジャンプ横



（3）ポールを用いたトレーニング　蛇行前後横

（4）マットを用いたトレーニング　ランニングから前後転、ジャンプ等

（5）風船を用いたトレーニング
セーフティーマットの上に立ち、風船を上に上げながら3方向から投げられるボールを順番に返す。

（6）ビブスピックアップ
後上方に投げられたビブスを片手で取る。

5．フットワークからボールコンタクト

ここでは、速いフットワークでの位置取りからボールコンタクトを意識することをねらいとしていた。脚を肩幅に開き膝を伸ばした状態を保ち、常に素早いサイドステップで移動する。この後、実際にボールを受けることで、位置取りからボールコンタクトへスムーズに移行できるようトレーニングしていた。

（1）2ポイントの位置取り
（2）2ポイントの位置取り（切り返しあり）
（3）3ポイントの位置取り（1人、2人）
（4）ステップ台を用いたトレーニング





6．パス、投トレーニング

（1）対面パス
パスの前後に動きを加える。複数のボールを使う。

（2）投トレーニング（メディシンボール）
胸前、頭上、長座手渡し、四つん這いで転がしてパス、8の字手渡し、背中あわせで頭上・股下手渡し、横から両手、たたきつけ

7．ポジショニング練習

（1）サイドシュート
（2）中央からのシュート（ポールタッチから）



（3）ライン際のシュート（防御なし、あり）
（4）フローターからのシュート

【まとめ】

オランダハンドボールウィークのゴールキーパートレーニングでは、ゴールキーパー専門のコーチが、選手が常に集中し意欲的にトレーニングに取り組めるような工夫をし、コーディネーションやボールコンタクト、位置取りを意識したトレーニングが丁寧に行われていた。このようなバリエーションの豊かさや飽きさせない工夫が日本のゴールキーパートレーニングに応用できると考えられる。

大学女子トップチームにおける攻撃力および防御力の評価基準の作成 —記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて—

中原麻衣子（筑波大学大学院）、石野実加子（北國銀行）、會田　宏（筑波大学）

キーワード：縦断的なスコア分析、全日本インカレ優勝、評価基準

【緒言】

本研究では、大学女子トップチームの20年間にわたる公式戦を対象に記述的ゲームパフォーマンス分析を行い、得られた分析結果を全日本インカレで優勝した年とできなかった年の間で比較し、全日本インカレで優勝するために必要な攻撃力および防御力の定量的・客観的な評価基準を得ることを目的とする。

【方法】

1．対象チーム

関東学生リーグ連盟女子１部に所属するＴ大学

2．対象ゲーム

平成３年から平成22年までの春季・秋季リーグ、全日本インカレの全424試合を対象とした。この20年間において、Ｔ大学が全日本インカレで優勝したのは９回、優勝できなかったのは11回であった。

3．分析項目

Ｔ大学と対戦相手の攻撃回数、攻撃成功率、ミス数、ミス率、シュート数、ゴールイン数、シュート成功率、シュート占有率、ゴール占有率を分析した。シュートに関してはセット、速攻、7mスローの３つに分けて分析を進めた。

4．分析の手続き

分析結果を全日本インカレで優勝した年の試合（197試合）とできなかった年の試合(227試合)間で比較するために、対応のないｔ検定を行った。統計処理の有意性は危険率5%、1%、0.1%で判定した。

【結果】

1．Ｔ大学の攻撃について

攻撃回数は、優勝した年とできなかった年に有意差は認められなかった（表１）。攻撃成功率は、優勝した年ができなかった年に比べて、有意に高い値を示した。ミス数およびミス率は、優勝した年が有意に低い値を示した。

総シュート数、セットシュート数は、優勝した年が有意に高い値を示した。

シュート占有率とゴール占有率は、セット、速攻、7mスローのいずれにおいても優勝した年とできなかった年の両群間に有意な差は認められなかった。

総ゴールイン数、セットゴールイン数、速攻ゴールイン数は優勝した年が有意に高い値を示した。

シュート成功率、速攻シュート成功率は優勝した年が有意に高い値を示した。7mシュート成功率は優勝した年が有意に低い値を示した。

2．対戦相手の攻撃について

対戦相手の攻撃回数、ミス数、ミス率については、優勝した年とできなかった年の間に有意な差は認められなかった（表１）。対戦相手の攻撃成功率は、優勝した年が有意に低い値を示した。

総シュート数、セットシュート数、7mシュート数は優勝した年とできなかった年の両群間に有意な差は認められなかったが、対戦相手の速攻シュート数は、優勝した年が有意に低い値を示した。

対戦相手のセットシュート占有率は優勝した年が有意に高い値を示し、速攻シュート占有率は優勝した年が有意に低い値を示した。

対戦相手の総ゴールイン数、セットゴールイン数、速攻ゴールイン数は、優勝した年が有意に低い値を示した。

対戦相手のセットゴール占有率は優勝した年が有意に高い値を示し、速攻ゴール占有率は優勝した年が有意に低い値を

表 1　攻撃力と防御力の分析結果

分析項目	T 大学 インカレ優勝（197 試合）	T 大学 その他（227 試合）	T 大学 差	対戦相手 インカレ優勝（197 試合）	対戦相手 その他（227 試合）	対戦相手 差
攻撃回数（回）	67.0 ± 8.9	66.8 ± 7.0	−	67.2 ± 8.9	67.4 ± 7.3	−
攻撃成功率（%）	44.9 ± 8.5	40.2 ± 8.8	***	24.3 ± 7.4	28.1 ± 9.9	***
ミス数（回）	15.8 ± 4.4	18.6 ± 5.7	***	25.7 ± 7.7	24.9 ± 7.7	−
ミス率（%）	23.6 ± 6.2	27.9 ± 8.2	***	38.0 ± 8.7	36.8 ± 10.2	−
総シュート数（本）	51.3 ± 8.4	48.2 ± 7.7	***	41.5 ± 6.9	42.5 ± 7.6	−
セットシュート数（本）	32.8 ± 6.4	30.8 ± 6.3	**	32.5 ± 6.4	31.6 ± 6.9	−
速攻シュート数（本）	14.5 ± 8.2	13.7 ± 6.3	−	6.1 ± 3.3	8.1 ± 4.7	***
PT シュート数（本）	3.9 ± 2.1	3.7 ± 2.0	−	2.8 ± 1.8	2.7 ± 1.9	−
セットシュート占有率（%）	64.8 ± 11.9	64.3 ± 10.2	−	78.6 ± 8.8	74.7 ± 10.7	***
速攻シュート占有率（%）	27.3 ± 12.1	27.8 ± 10.2	−	14.7 ± 7.2	18.6 ± 9.6	***
PT シュート占有率（%）	7.8 ± 4.5	7.9 ± 4.5	−	6.7 ± 4.3	6.7 ± 4.9	−
総ゴールイン数（本）	30.3 ± 7.9	26.9 ± 6.9	***	16.1 ± 5.0	18.7 ± 6.2	***
セットゴールイン数（本）	16.6 ± 4.7	15.0 ± 4.1	***	10.9 ± 4.0	11.9 ± 4.3	*
速攻ゴールイン数（本）	10.6 ± 6.7	9.1 ± 5.2	**	3.3 ± 2.2	4.8 ± 3.3	***
PT ゴールイン数（本）	3.0 ± 2.0	2.9 ± 1.7	−	2.0 ± 1.5	2.0 ± 1.6	−
セットゴール占有率（%）	56.0 ± 14.6	56.5 ± 12.3	−	67.9 ± 15.0	64.3 ± 14.6	*
速攻ゴール占有率（%）	33.2 ± 14.0	32.3 ± 12.1	−	20.0 ± 12.0	24.5 ± 12.8	***
PT ゴール占有率（%）	10.5 ± 7.0	11.2 ± 6.7	−	12.1 ± 9.3	11.2 ± 9.0	−
シュート成功率（%）	58.7 ± 9.7	55.7 ± 9.7	**	39.0 ± 10.2	44.0 ± 12.5	***
セットシュート成功率（%）	50.8 ± 11.2	48.9 ± 11.3	−	33.7 ± 10.7	38.2 ± 13.3	***
速攻シュート成功率（%）	72.3 ± 15.4	65.3 ± 14.5	***	53.6 ± 24.0	59.5 ± 22.4	**
PT シュート成功率（%）	76.0 ± 27.4	81.0 ± 22.5	*	69.2 ± 34.1	74.8 ± 31.0	−

***：$p < 0.001$　**：$p < 0.01$　*：$p < 0.05$　-：ns

示した。

対戦相手のシュート成功率、セットシュート成功率、速攻シュート成功率は優勝した年が有意に低い値を示した。

【考察】

大学女子トップチームが全日本インカレで優勝するためには、攻撃ではミス率を 24% 以下に抑え、シュート成功率を 59% 以上に高め、45% 以上の攻撃成功率をおさめ、ノーマークが多い速攻シュート成功率を 72% 以上に高めることが基準となる。

防御では対戦相手のシュート成功率を 39% 以下に抑え、攻撃成功率を 24% 以下にすること、セットゴール占有率 68% 以上、速攻ゴール占有率を 20% 以下にし、対戦相手の速攻攻撃を抑え、セット攻撃の割合を多くさせることが基準となる。シュート成功率はノーマークでのシュートほど成功率が高くなると考えられるため、防御ではセット場面や速攻場面において対戦相手にプレッシャーを与え、対戦相手が少しでも不利な状況でシュート局面を迎えられるようにすることが重要であると考えられる。

【まとめと実践現場への提言】

本研究では、全日本インカレで優勝するために必要な攻撃力および防御力の評価基準を得ることができた。

ゲームにおいては、特にミス率を抑え、確実にシュートまで行く機会を多くし、シュート成功率を 59% 以上、攻撃成功率を 45% 以上にあげること、対戦相手の速攻攻撃を少なくし、セット攻撃の割合を多くすることが重要であると示唆された。

IHF シンポジウムに参加して

村松　誠（駒澤大学）

今年の夏、8月28日から31日まで、中東のカタール・ドーハにおいて、国際ハンドボール連盟のシンポジウムが開催された。私は、このシンポジウムに参加の機会を与えられましたので、その概要について報告致します。

また同時に、IHF スーパーグローブがドーハにおいて開催されており､少しではあるが観戦できたことは幸いであった。残念なことは、日程の都合上、9月1日の決勝戦を観戦できなかったことである。参考までに参加チームを以下に列挙する。

BM・Atletico マドリッド（スペイン）
Zamalek（エジプト）
El-Jaish（カタール）
MetodistaSaoBernardo（バーレーン）
TWH キール（ドイツ）
Mudhar（サウジアラビア）
Al-Sadd（カタール）
シドニー大学（オーストラリア）

詳細内容については、日本協会コーチ・レフェリーシンポジウムで、審判員会、指導員委員会から公表される（CCM委員のタボロスキー氏より、その様に指示を受けた。）ことになっているので、ここでは私が気づいた点について主な幾つかを報告する。

ベスト8以上のゲーム分析で、男子ではロンドンオリンピックから、女子では2007年から、攻撃回数は減少を示している。これは生産的でないクイックスタートなどをしなくなったためで、無理にクイックスタートを仕掛ければ、ミスの発生率も高くなるためである。

直接2分間退場の事例がDVDを使って示された。これは、私の勉強不足もあるが、このシンポジウムに参加する前の、ジャパンオープン大会や、関東ブロック大会でも、従来のレフェリングと変わらずに見ていたが､スーパーグローブでは、開始早々から2分間退場が出て、少々違和感を覚えた。しかし、ガレーゴ氏の講習に参加して納得がいくものであった。

マッツ・オルソン氏のゴールキーパー講習については、10年以上も前から、ビデオや実際の講習を目にしてきたが、今回の彼の発言の中で、（彼は1990年代の世界のトップゴールキーパーのひとりであった。）彼がやっていたゴールキーピングでは今やゴールは守れないとの発言は感銘を受けた。指導者は、常に新しい情報を得て、それをトレーニングの進歩に繋げることが大切であることを示していると思われる。彼は、ロンドンオリンピックで優勝した、ノルウェーのゴールキーパーコーチであるが、彼の成果を表したものと言える。

ハッサン・ムスタファ会長は、オープニングセレモニー、クロージングセレモニー共に挨拶に立った。特に、クロージングセレモニーでは、オリンピック競技であるハンドボールが他の競技に負けないようにするためには、ハンドボールの魅力を高めて行かなくてはならない、そのためには、指導者と子どもが重要であると強調された。そのあと、フロアーからの要望等、発言を求められた。会長はすぐさま、記録を取



セレモニーで挨拶に立つ、ハッサン・ムスタファ IHF 会長



スーパーグローブ、オフィシャル席、IHF オフィシャルが紹介されているところ。隣は、TD のガレーゴ氏



ムスタファ会長から修了書を受け取った筆者

るように要望され、紙とペンが用意され、すぐ隣の役員がペンを走らせた光景もあった。発言には、ただ単に謝辞が述べられただけのものもあったが、このコースはトップコーチのためのもので、もっと一般的なコースも開催してほしいとの要望もあった。

【日時】2012 年 8 月 28 日～8 月 31 日
【場所】カタール、ドーハ
【会場】ホリデイ・ビラ（ドーハ空港から車で 10 分程）・スポーツホール
【参加国】エジプト 3 名、レバノン 1 名、ガボン 2 名、イラク 6 名、カザフスタン 1 名、ナイジェリア 7 名、日本 1 名、ケニア 2 名、韓国 4 名、イラン 1 名、セルビア 1 名、バーレーン 4 名、チュニジア 1 名、ヨルダン 2 名、ドイツ 1 名、カタール 70 名、合計 107 名
【講師】
コーチ論：フランチセック・タボロスキー、デートリッヒ・シュペーテ、ジスラーソン（THW キール監督）、タラント・ドイシュバイエフ、Z. Marczinka、M. Biegler、Dr. Mokni、マッツ・オルソン
レフェリング：マンフレッド・プラウゼ、R・ガレーゴ、R. Buergi
実技：M. Biegler、マッツ・オルソン
講習プログラム：個々の講習題目についてはほぼ変更は無かったが、毎日変更版が出され、枠組みが変更された。レフェリングに関しては、講師の講習内容が違っていた。

講習言語はメインが英語で、アラブ語とフランス語が同時通訳されていた。

講習内容は、オリンピックと世界選手権の最新のゲームトレンド分析、最新のレフェリング、アンチドーピング問題、ロンドンオリンピックにおけるノルウェーの GK トレーニングと技術分析、THW キールのゲーム哲学、スペインのディフェンスゲーム哲学などが講義された。実技では、カタール Jr.（？）をモデルに、用具を使ったトレーニングが披露され、GK トレーニングでは、マッツ・オルソン氏のロンドンオリンピック優勝のノルウェー GK コーチとしてのトレーニングが披露された。

なお、詳細については、コーチ・レフェリーシンポジウムとして公表して行く予定である。

最後に、今回の様な貴重な経験をさせて戴きました関係者の皆様に御礼申し上げます。



スーパーグローブの試合から

頂点をめざす すべてのアスリートへ。



原寸大：W45mm×D17mm×H70mm

2チャンネル同時出力で さらに強力サポート。

もっと速く、もっと強く、昨日の自分を超えるために常に限界の先をめざすアスリートたち。
2チャンネル出力になって進化したポータブル低周波治療器は
損傷した筋肉により効果的に働きかけ、場所を選ばずにいつでも自分の体をケアすることができます。
世界のスポーツの舞台を支えるITOのポータブル低周波治療器が
極限で戦うアスリートのコンディショニングをさらに強力サポートします。







※医科向けの医療機器のため、専門家の指導のもとに使用してください

60g 超軽量

本体重量わずか60g（充電池含む）、サイズも極小。ITOの技術が、今までになかった超軽量・コンパクトな低周波治療器を実現しました。

12時間 連続使用

リチウムイオンバッテリーにより、最大12時間の連続使用が可能。この小ささで、スタミナも一流です。

3つの治療モード COMB / CARE / PAIN 鎮痛・治癒

- COMB〈鎮痛+治癒〉 Allタイムケア
  トレーニングを終えた全てのアスリートに効果的な、鎮痛と治癒を組み合わせたケアモードです。
- CARE〈治癒〉 OFFタイムケア
  移動中や休憩中などの体を休めている時にも、トレーニングで損傷した筋組織の治癒を促進します。
- PAIN〈鎮痛〉 ONタイムケア
  トレーニング中など、現場で起こった捻挫や筋肉・関節の痛みといった急なアクシデントに有効です。

日本協会創立75周年記念誌編集委員会より

日本ハンドボール協会は、来年２月２日に創立75周年の節目を迎えます。これを記念して、これまでの歴史を纏めた記念誌を発行いたします。日本におけるハンドボールの歴史を辿るには、これ以上の資料はありません。また各全国大会で活躍されたチームの記録も収録をしています。是非とも、個人的にも、各チームにおかれましても、一部手元に置かれて、チームや地域協会の年誌作成、卒業論文作成資料としてなど、各方面における資料としてご活用戴ければと願っております。また、全国大会でご活躍されたチームには、資料室や、図書館に備え付けて戴きたいと考えております。

記念誌は、原稿もほぼ出揃い、最終段階に入っております。ご寄稿、ご協力戴きました皆様には、厚く御礼申し上げます。皆様のご協力なしには、これほどのものは出来ませんでした。ここでは、記念誌の概略をお知らせいたします。

書籍体裁：Ｂ５版　620頁程度（ページ数は確定しておりません）

掲載内容　（　）内は執筆者

口絵：各種資料や歴史的写真

ハンドボール年表

Ⅰ、日本協会年度の動き

伝来期・胎動期・草創期・復興期・発展期・国際期・激動期・以降各年度ごと

Ⅱ、都道府県協会のあゆみ

Ⅲ、日本協会加盟団体、専門委員会の活動

全日本社会人連盟（江成元伸）・全日本学生連盟（福地賢介）・全国高体連ハンドボール部（船木浩久）・全国高専体連ハンドボール部（古屋正俊）・全国中体連ハンドボール部（齋藤仁宏）・全日本車椅子連盟～障がい者ハンドボール～（小西博喜・半田忠史）・審判委員会（越田義昭）機関誌委員会（近久紀人）・女性委員会（上原信子）・小学生委員会（山本繁）・マスターズ（小山哲央）・20万人会（中野利一）・学校体育研究会（佐藤靖）・公認スポーツ指導者制度（笹倉清則）・コーチング研究会（田中守）・NTS（蒲生晴明）・医・科学委員会（斉藤慎太郎）・アンチドーピング（西山逸成）・ビーチ競技委員会（本間誠章）

Ⅳ、国際大会・国内大会の歴史

日本が参加する６大国際大会・球史を彩る「全日本選手権」の歩み・時代の嵐を受けた大会・団体

Ⅴ、特別インタビュー・座談会

パイオニアインタビュー／和田旬功氏

特別座談会Ⅰ：木野実、近森克彦、野田清、本田洋、氷海正行、佐々木健一、杉山茂、司会：川上整司

特別座談会Ⅱ：津川昭、蒲生晴明、田口隆、松井幸嗣、司会：川上整司

特別座談会Ⅲ：青戸あかね、櫛田亮介、久保弘毅、司会：長谷川千紗

特別座談会Ⅳ：市原則之、川上憲太、福地賢介、佐分正典、川上整司、杉山茂、司会：村松誠

Ⅵ、世界・日本ハンドボール界その時々

大谷武一論（大西武三）・日本協会の誕生・ヨーロッパでの発生（村松誠）・戦中。練習なき、試合なき日々（萩原一次）・戦中。歴史の灯守った女子界・関東学生リーグの発足（萩原一次）・関西学生リーグの誕生（中江義雄）・「関西学生」早々の思い出・ルールの変遷（７人制）（村松誠）・世界の舞台へ（レフェリー史）（安藤純光）・女子実業団黄金期の思い出（池田二三恵）・日本ハンドボール（男子）の技術・戦術の変遷（蒲生晴明）・「情報力」活かす総合戦力の確立を（水上一）・日本女子ハンドボール界の歩み（井薫）・日本男子のハンドボールのターニングポイント（平岡秀雄）・日本リーグ発足までの曲折・学校体育とハンドボール（角紘昭）・日本のビーチハンドボール（本間誠章）・熊本世界選手権（井薫）・スポーツ仲裁裁判所（藤本元）・国際ハンドボール連盟（IHF）学校ハンドボールプロジェクト（山田永子）・宮崎大輔の果たした役割（久保弘毅）・田中美音子の果たした役割（村井暁子）・ドイツへのきっかけと選手生活（内林絵美）・ハンドボール文献総ざらい（川上整司）・世界のハンドボール、現状と将来（渡邊佳英）・{50年史からの復刻４記事}・特別リポート、"５つの歴史" その背景を探る（杉山茂）・特別企画「思い出のひとコマ」

Ⅶ、名簿編・日本協会歴代役員、表彰者、審判員（国際・Ａ級）、公認指導者

Ⅷ、大会記録編・国内大会編、国際大会編、日本代表国別対戦成績表（男・女）、男子日本代表国際試合出場ベスト50、女子日本代表国際試合出場ベスト50

Ⅸ、資料編

これまで20回の編集委員会で議論を重ね、座談会など開催しながら、以上の様な内容となりました。

口絵には、各方面でお願いしてまいりましたが、皆様のご協力もあり、歴史的に重要な資料や写真を16ページに渡って収録しました。もちろんスター選手の華々しい活躍も収録しております。

ハンドボール年表も新たに作成いたしました。これも、ただ単にハンドボール界の流れだけでなく、社会一般の動きも付け加えましたので、社会の動きと、ハンドボールの流れが比較してみることができ、興味深いものとなっています。

各都道府県の歩みについては、47全都道府県から原稿をお寄せいただき、全国をカバーすることが出来ました。日本の隅々までハンドボール活動が行われていることが活き活きと分かります。

各連盟や日本協会各セクションからもご寄稿戴きました。ご依頼した量よりかなり多くのご寄稿を戴いたセクションもございますが、制約上の問題もあり、割愛せざるを得なかったことは、残念であり、お詫び申し上げます。

日本ハンドボールの草創期に活動をされ、ご活躍なされた方は、ごく少なくなっています。そのお一人であります和田旬功氏に、パイオニアインタビューとしてお話を伺っております。日本ハンドボール界の草創期の活動や状況を語って戴き、その様子を伝えて戴いております。

4本の座談会を企画運営いたしました。日本のハンドボールが世界に認められた1970年代から、その後のナショナルチームの動きを中心に、日本のハンドボールを語って戴きました。さらには若手指導者の日本ハンドボール協会100年に向かっての抱負を語って戴きました。これから100年に向かっては、現在の若手が主役になります。力強いメッセージが語られています。最後に、現在の協会運営に中心的役割を担って戴いております皆様にお集まりを戴き、現状認識と問題点、改革の方向性について語って戴きました。

この座談会は、記念誌の中核をなす企画です。ご参加戴きました皆様以外にも、お声かけをしたり、ご参加をご依頼すべき方々もありました。残念ながら、勤務のご都合や物理的条件でご参加いただけなかったことは非常に残念でした。積み残された課題は、機関誌などで継続して戴ければ、ハンドボール界発展の一助になると思われますので、是非とも実現してほしいものです。

特別企画「思い出のひとコマ」では、50年史以降の全国大会優勝チームに、アンケート方式で、その思い出を語って戴きました。ハンドボールに取り組んだ熱い思いや、感動が述べられています。それぞれの方々の人生における財産となっている様子が窺われます。

名簿編では、日本協会役員、年度表彰者、公認審判員、公認指導者のお名前を掲載いたしました。特に、公認審判員、公認指導者の方々は、ハンドボール活動の中核をなす方々です。歴史的には、資格取得をされた方をも掲載すべきと考えましたが、物理的な制約上、現在の登録者に限らさせて戴きました。

大会記録編では、日本協会主催の全国大会の結果を掲載いたしました。編集中には、50年史におけるプリントミスなどを発見しましたが、調査の上出来る限り正確なものに致しました。国際大会では、オリンピックをはじめとして、主要な国際大会の記録を掲載いたしました。また、日本代表の国別対戦成績、日本代表国際試合出場数ベスト50を簡潔にまとめています。

なお、一般の方々にもご購読いただけるよう、頒布計画もしております。しかしながら、制作数が限られていますので、限定頒布となります。現在のところ、1冊、1万円（消費税込・送料別）の予定であります。詳しくは、日本協会ホームページ、機関誌、DMなどでご案内します。

スコアールーム

第67回国民体育大会

開催期日：2012年10月5日(金)～9日(火)
会　　場：岐阜県・飛騨市、下呂市、高山市

【成年男子】

▼ 1回戦

佐　賀　30（16－10、14－11）21　三　重
福　井　31（13－7、18－12）19　兵　庫
宮　城　41（21－10、20－11）21　北海道
埼　玉　50（23－13、27－11）24　香　川
愛　知　37（18－9、19－6）15　長　崎
大　阪　20（10－6、10－11）17　千　葉
茨　城　33（16－14、17－15）29　岩　手
広　島　27（14－11、13－9）20　岐　阜

▼ 準々決勝

佐　賀　43（23－13、20－14）27　福　井
埼　玉　41（20－4、21－13）17　宮　城
愛　知　40（20－9、20－12）21　大　阪
広　島　35（21－9、14－10）19　茨　城

▼ 準決勝

埼　玉　37（18－21、19－14）35　佐　賀
愛　知　35（20－11、15－19）30　広　島

▼ 3位決定戦

佐　賀　34（15－13、19－11）24　広　島

▼ 決　勝

埼　玉　33（14－14、19－14）28　愛　知

【成年女子】

▼ 1回戦

福　岡　40（21－9、19－14）23　北海道
東　京　33（20－7、13－10）17　宮　城
長　野　28（11－10、17－17）27　茨　城

▼ 2回戦

神奈川　25（12－8、13－9）17　福　島
鹿児島　40（18－13、22－7）20　大　阪
石　川　52（28－7、24－6）13　福　岡
愛　知　34（16－9、18－12）21　秋　田
広　島　30（16－14、14－4）18　東　京
香　川　26（14－8、12－15）23　三　重
岐　阜　25（12－7、13－12）19　兵　庫
熊　本　50（24－11、26－5）16　長　野

▼ 準々決勝

石　川　41（20－3、21－7）10　愛　知
鹿児島　31（13－11、18－8）19　神奈川
広　島　27（10－12、17－8）20　香　川
熊　本　34（17－5、17－6）11　岐　阜

▼ 準決勝

石　川　33（17－9、16－10）19　鹿児島
熊　本　27（13－3、14－8）11　広　島

▼ 3位決定戦

鹿児島　22（14－8、8－10）18　広　島

▼ 決　勝

熊　本　20（12－11、8－8）19　石　川

【少年男子】

▼ 1回戦

山　口　29（11－11、18－8）19　三　重
宮　城　42（21－10、21－17）27　北海道
大　分　28（13－11、15－9）20　神奈川

▼ 2回戦

山　口　25（11－13、14－9）22　沖　縄
埼　玉　32（18－17、14－11）28　兵　庫
宮　崎　31（15－14、16－12）26　群　馬
岩　手　24（13－9、11－9）18　愛　知
福　井　43（20－14、23－12）26　宮　城
岐　阜　33（17－7、16－13）20　茨　城
香　川　39（17－8、22－9）17　岡　山
大　分　30（14－17、16－8）25　大　阪

▼ 準々決勝

山　口　22（12－6、10－11）17　埼　玉
宮　崎　24（13－9、11－14）23　岩　手
岐　阜　32（20－14、12－17）31　福　井
大　分　31（16－14、15－16）30　香　川

▼ 準決勝

山　口　24（12－10、12－11）21　宮　崎
岐　阜　31（13－14、18－14）28　大　分

▼ 3位決定戦

大　分　29（13－17、16－11）28　宮　崎

▼ 決　勝

岐　阜　31（13－10、18－14）24　山　口

【少年女子】

▼ 1回戦

香　川　34（17－5、17－10）15　福　島
長　崎　30（15－7、15－7）14　北海道
富　山　32（15－11、17－13）24　三　重
大　阪　31（16－8、15－10）18　茨　城
岐　阜　27（16－13、11－13）26　埼　玉
京　都　29（15－11、14－9）20　岩　手
東　京　22（12－7、10－11）18　大　分
山　口　33（15－7、18－13）20　愛　知

▼ 準々決勝

香　川　30（14－6、16－4）10　長　崎
富　山　29（11－12、18－10）22　大　阪
京　都　28（11－7、17－10）17　岐　阜
山　口　39（22－12、17－7）19　東　京

▼ 準決勝

香　川　27（14－10、13－13）23　富　山
京　都　28（14－11、14－13）24　山　口

▼ 3位決定戦

富　山　22（12－10、10－11）21　山　口

▼ 決　勝

香　川　24（11－8、13－9）17　京　都

がんばれハンドボール20万人会「サポート会員」10月入会・継続会員

【茨　城】野村正志【埼　玉】小澤隆志、小澤智子【東　京】橋本　進、東尾吉信、山田育代、荒川晶夫、三宅杏奈、仁平貴士、泉　直樹【神奈川】白井　章【富　山】林　裕子、若松路夫【静　岡】細澤　覚【愛　知】伊藤克美、伊藤十和奈、小林　勇、山本智子、柿原和幸【三　重】福田亜紀【大　阪】西端美重子、中塚冨佐子、小藪律子【広　島】木下しのぶ、塩屋正子

【12月・1月の行事予定】

【会　議】
2012年12月８日(土)　常務理事会
2013年１月12日(土)　常務理事会

【大　会　等】
2012年12月7日(金)～16日(日)
　第14回女子アジア選手権
　　　　　　（インドネシア・ジョグジャカルタ）
2012年12月19日(水)～23日(日)
　第64回全日本総合選手権（大阪市）
2012年12月24日(月)～27日(木)
　第21回JOCジュニアオリンピックカップ（福島市）
2013年1月４日(金)～６日(日)
　NTSセンタートレーニング〈高校生〉（東京）
2013年1月12日(土)～14日(月)
　NTSセンタートレーニング〈中学生〉（東京）

機関誌送付先各位
機関誌：チーム内回覧のお願い（機関誌専門委員会）

協会機関誌は、大会報告を始め種々の協会情報を掲載し年８回発行しております。
送付先は、各チーム登録の監督・指導者等となっておりますが、指導者のみならず、選手にも読んで戴きたい記事も在りますので、チーム内の選手にも是非回覧戴ければと存じます。

HANDBALL CONTENTS Dec.

（登録チームの購読料は登録料に含む）



(財)日本ハンドボール協会編 『ハンドボール』第五三二号

平成二十四年十一月二十六日印刷
平成二十四年十二月一日発行

東京都渋谷区神南一―一―一
電話 代表〇三―三四八一―二三六一
振替 〇〇一二〇―七―一〇二九三

編集兼発行人 川上憲太

定価 年間三三〇〇円